
COLORS 第一部

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COLORS 第一部

【Nコード】

N2099A

【作者名】

那音

【あらすじ】

主人公・櫻井粹然サクライスイゼンは、青銀色の髪と黒と銀のオッドアイをという異様な容姿を持つ現役高校生。その容姿のおかげで学校の不良に絡まれては喧嘩を繰り返し、孤独で孤高な生活を送っていた粹然だが、ある春の雨の日喧嘩に負け、しけた路地裏で死にかける。だがそこを死神に拾われ、そして粹然は自らの運命と世界の真実を知り、裏世界へと巻き込まれていく。

運命と真実

A t 1「運命」

S I D E 1 カズ

ひどい雨の日だったことを覚えている。

傘も差さずに、憂鬱な気分のまま歩いていた。
頬に張り付く髪がうつつうしい。肌に張り付くシャツの感触が気持ち悪い。

しけた路地裏。音も匂いも雨に掻き消される。

冷たく、全てを洗い流す雨。強く、刺すように降り注ぐ。
ドシャツ……と。

何かが——そう例えば人間が——倒れるような音がした。

目に付いたのは血の紅ではなく、まるで夜の闇で息づく月のような青銀色だった。

確かにそれは月と同じ色をしていた。青銀色に輝く長い髪。
青銀色の野良犬を見つけた。

「……………でっけえ野良犬」

その、青銀色の髪を踏みつけた。反応が無い。

「生きてんのか？」

動いた。血がこびり付いている唇が。

「……………っ」

まともに声になってない、低いうめき声。

「おー、生きてんな」

うつ伏せに倒れている野良犬の、血まみれの脇腹を足で突いた。
ひどい出血だ。今すぐ死ぬことは無いが、このまま雨に打たれ続け

れば危ないかもしれない。

「なあお前、今、死にてえ？」

しゃがんで、問いかけてみた。

「・・・・・・っ、ね・・・・・・」

それは、全くの気紛れだったけど。

「死にたく・・・・・・ねえ・・・・・・っ」

野良犬を、拾った。

「じゃあ、生かしてやるよ」

毛並みのいい青銀色をつかんで顔を上げさせる。

傷の痛みからか、それともぞんざいに扱われた屈辱からか、野良犬は血まみれの顔を歪ませた。

額が深く切れてる。流れた血が雨と混じって頬を伝っていた。顔のいたるところに、殴打の跡が浮き出ている。

それでも一番目を引くのは、ぎらぎらと睨み付けてくる黒と銀の双眸。

それは「仲間」と「最強」の証明だった。

仲間がいた。

血にまみれて、雨に打たれて、野良犬のように路地裏に転がって最強の仲間が、俺の下で這いつくばって死にかけていた。

「もう、怖がらなくていい」

野良犬は、警戒して睨み付けるのを止めない。

「お前は一人じゃない」

野良犬が、うなった。

それは、狼のうなり声に似ていた。

「俺たちが、仲間だ」

SIDE 2 ゼン

怖がる？

誰が？

俺だって言いたいのか畜生。

ツイてねえにもほどがあんだろ。

・・・・・・ホントに、恨みなんか買うもんじゃねえな。

自分で言うのもなんだけど、武術の天才で喧嘩じゃ完全無敵の俺でも、三十対一はさすがに無理っす。

しかも畜生め。やつら待ち伏せて鉄パイプ持参で極めつけはナイフでぶっすりかよ。

恨みなんか買うもんじゃねえって言ったけど、恨みなんか買った覚えねえのに。

何？目立つからですか？

可愛いそー俺。

血が止まらなくて、頭がくらくらしてきて、ツイてねえことに雨まで降ってきやがって。

このまま、死ぬんだと思った。
だから。

そのとき現れたあんたは、死神かと思った。

「なあお前、今、死にてえ？」

死にたくねえに決まってるんだろ。

俺はまだ、死にたくねえんだ。

「俺たちが、仲間だ」

頼むよ。

連れてかないでくれ。

死神の仲間になんかなりたくねえよ。

死にたくねえ。

連れてかないでくれ。

頼むから、連れてかないでくれよ。

死にたくねえよ・・・・・・。

「・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・きる・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・俺は死んだのか？

ここはどこだ？

地獄か？

「おい、いい加減に起きろ。野良犬」

俺はゆっくりとまぶたを上げた。

白い。白いつて言うことは少なくとも地獄ではなさそうだ。

あの世かもしれないけれど。

とりあえず俺がいるのはベッドの上らしい。

あの世つてのはベッドもあるもんなのか？

「おう、起きたか」

一人の男が、俺を覗き込んできた。

目に飛び込んできたのは、百鬼夜行のタトゥー！。

・・・・・・・・・・前言撤回。

「あー。やっぱり俺死んでるわ」

「あ？」

やっぱりここは地獄だ。

なんも悪いことしてないのに、よりによって地獄に来ちまうとは。

ホントに、とことん俺はツイてねえ。

「鬼がいる・・・・・・・・・・」

つぶやいた直後、俺の頭に拳が落ちてきた。殴られた頭よりも反動に響いたわき腹の傷のほうで痛んで、半ば本気で臨終かと思っ

た。

「おい、カイ」

聞き覚えのある声。それは気絶する前に聞いた声だった。

「一応怪我人だろ。殺すなよ」

「お前に言われたくねえよ」

鬼が呆れた声と共に見た方向。

そこに、死神はいた。

気絶する直前の記憶と、あまり変わらない黒シャツ姿。

そしてぼんやりとだが覚えている、黒と蒼の目。

両目の色が違う、それは俺と同じ双眸だった。

「ああ、死神まで居やがる」

でも、これで決定的だ。

「俺もうマジで駄目だ」

ここは地獄だ。

「死んだー」

シーツの上をごろんと横になった俺に容赦ない蹴りが入って、俺はベッドの上から転げ落ちた。

傷がさつきよりもずっと痛んで、思わず涙目になってしまったのが悔しい。

「いつまでも感傷に浸ってんじゃねえよ犬う」

蹴り付けやがったのはどうやら死神のほうで、鬼がその横で呆れたように目を覆っていた。

「ま、死神つつーのは当たらずとも遠からずってやつだな」

死神はに、と笑みを浮かべて、俺の前にしゃがみこんだ。

俺は死神の顔を初めてまともに見た。

思いがけず端正な顔立ちをしてる。二十代半ばかそれ以上に見える。それでもやっぱり目を引くのは、黒と蒼の、怪しい笑みを灯した目――。

自信に満ちたような、相手を嘲るような笑みが、死神にはよく似合っていた。

「ようこそ」

嗚呼。

「天国寸前のイカれた地獄へ」

こりゃあもう、ツイてるツイてねえの問題じゃねえな。

「犬。てめえの名は？」

人生最悪の日だ。

スイゼン

「粹然。櫻井粹然……だ」

こうなれば、もうどうにでもなれ。

「粹然か……。よし、粹然。お前は今日から『ゼン』だ。
櫻井粹然という名は捨てて、これからはそう名乗れ」

死神が笑った。

俺、櫻井粹然。

享年十六歳。

秋の雨の日にて。

死亡、確定。

A t 2 「真実」

昔からツイてなかった。

ありえないほど目立つ容姿が、疎ましくてたまらなかった。
ガキのころは誰も気味悪がって近づこうとしなかったし、俺はい
つも一人だった。

親父はロシア系のクォーター。お袋は生粋の日本人。

親父は確かに、クォーターでも銀髪と銀の目を持っていたけれど。
そこからどうして右目が銀で左目が黒なんていう子供が生まれる？
髪は父親譲りの青銀色。

どちらかというと顔は母親似。

親父なんかの遺伝がなければ、何の変哲もないただの高校生にな
れたのに。

全く、何から何まで、本当に親父は嫌いだ。

こんな髪と目がなければ。

学校の不良に目をつけられて、絡まれては喧嘩の繰り返し。
そして報復として脇腹を刺される重傷を負って、死神に拾われる
こともなかったのに。

今日人生最悪の日を迎えることになったのも。

今日「櫻井粹然」が死んだのも。
全部全部親父譲りのこの髪と目のせいだ！！

あの後。

ベッドの上に這い上がった俺は、死神の話を聞いた。

死神は引きずってきたいすに座って、鬼はその後ろの壁にもたれ
かかった。

「ここは『AFOW』^{アフュー}つつつてな」

死神——カズというらしい——は、煙草に火をつけて煙を吐いた。

「まあ、なんつーかマフィアだ」

まふいあ？

その言葉の意味を図りかねた。

俺の頭はまともに働こうとしなかった。

自分が知らない場所において、知らない人物と話をしてる。

どうも自分では到底想像もつかないような大きな渦に巻き込まれ
た感がある。

その感じに頭がいっぱいで、その働きが鈍くなっていた。
情けない。すっかりしろ。

今の状況についていってこれないなんて、情けなさ過ぎる。

そう自分に言い聞かせて、頭を戻す。

まふいあってアレか？

犯罪組織ってやつか？イタリアとかにいます？

情けないことにマフィアって日本にもあるんだ、とかそんなこと
しか浮かばなかった。

「マフィアって麻薬とか拳銃とか密輸して犯罪とか犯してる組織か
？」

「まあ、一般常識じゃそうなんだろうな」

一般常識ってことはここは違うのか？ていうかマフィアって言っ
ときながら違うってどういうことだよ。

全く、疑問しか浮かんでこないのがむかつく。

「ここじゃ麻薬は扱ってない。拳銃も……密輸はしてない。あるのはあるがな」

カズはふー、と煙を吐きかけてきた。

「それ、止める」

「あ？」

煙草は昔から嫌いだった。

今でも、吸ってるやつを見ると殴りたくなるほど嫌いだ。

一度などは吸いながら絡んできた学校の不良を本当に殴ってしまった。乱闘になったことがある。

「煙草は嫌いだ。止める」

「へえ、てめえ俺に意見しようなんていい度胸してるじゃねえか」

カズはにっと笑って顔を近づけてきた。ついでとばかりに煙を顔に吹きかけられて、半ば本気で殴ってやろうかと思った。

「煙草は止めねえ。てめえがどう思おうが俺には関係ねえ」

それでも、それだけ言われても、拳が出ることはなかった。

本能とでも言うのだろうか。

こいつは違うと。こいつは今まで俺が相手にしてきたチンピラとは違うと感じていたのかもしれない。

どうしてだろう。

こいつは危険だ。

こいつがその気になればそのときはすぐにでも殺される。

そんな気がした。

「話を戻すか。AFOWはそこら辺のマフィアとは違う。密輸なんてそんな下らないことはしない。犯罪も、多分犯してない」

じゃあなにしてるんだよ。

密輸も犯罪も犯していないマフィアなんて、マフィアといえるのか？

「じゃあ、何してるんだよ」

「他の犯罪組織の殲滅」

せんめつ？

その意味を知るのに、数瞬かった。

殲滅。皆殺しにして滅ぼすこと。残さず滅ぼすこと。

「そのために拳銃とか所持してるが、裏で流すような真似はしてねえ。潰したマフィアの麻薬や拳銃は、独自のルートで外国に売り飛ばしてる。まあ言ってみれば俺たちは、悪を潰す正義のマフィアってわけだ」

正義。カズの口から聞くそれは、なぜかひどく滑稽に思えた。

目の前にいるこの男は、第一印象が「死神」だったこの男は、「正義」とはありえないほどかけ離れていた。

カズ自身も本気で言ったわけではなさそうだった。

くっとかみ笑いをもらして、近くにあった灰皿に煙草を押し付ける。もうその灰皿にはずいぶん量の吸殻がたまっていた。

「そして……ここからが本題だ、ゼン」

カズはいきなり真面目くさった表情でそう切り出した。

「十年……いや、もっと前に、A F O Wの中でとある『力』が確認された」

カズはいすの背もたれに寄りかかり、またしても煙草を一本取り出し火をつけた。

「両目の色が違うことで、その人間は『力』を得る。……そうだな。それは超能力とも言っていていいし、『人間』を超えた特殊能力とも言っている」

何かとんでもないことを言われた気がする。

カズは今なんと言った？

力を得る？超能力？「人間」を超えた特殊能力？

滑稽に思えた。

いや、実際に滑稽だ。

カズが言わなくなっただって、そうだ例えば後ろの鬼が言っただってそれは滑稽にしか思えないだろう。

力を得るだって？馬鹿げてる。

「得る『力』は、能力者によって違う。例えば他人の傷を自分に移

したり、時間を自在に操ったり、人それぞれだ。A F O Wはこの事実を知ったとき、あらゆる手を使って能力者を集めた。世間がこの事実を知り能力者の奪い合いが始まる前に、戦力を自分の手中に収めるために。以来A F O Wの構成員はほとんど能力者だ」

馬鹿げてる。

馬鹿げているはずだ。

こんな話、冗談に決まってる。

………それなのに。

それなのにどうしてカズは、こんなに真面目な顔をしている？

「いつからこの『力』が存在していたのかはわからない。『力』を使うには強い意志が必要だからな。滅多なことじゃこの『力』は現れなかった。だから十数年前まで誰もこの存在に気付けなかった。A F O Wがこの存在に気付けたのは、全くの偶然だ」

………おかしい。

自慢じゃないが俺は、昔から嘘には敏感だった。

誰かが嘘を言っていると、ああこれは嘘なんだなと直感的に気付けた。

それなのにこの話は、そんな直感が来ない。嘘と言う気がしない。こんな話、嘘じゃないわけがない。

嘘でしかありえない。

それなのにどうして？

「この『力』は、目の色が反対色であるほど強力になる。例えば紅と蒼とかだ。そして幾多もある色彩の中でも、確認されている中で最も強いとされているのが、黒と白。つまり」

まさか。

まさかこれは。

「ゼン。お前は、最強の『力』を持つ人間なんだ」

真実の、話………！？

「待てよ………！」

情けないことに、震える声しか漏れてこなかった。

「……待てよ。なんだよそれ。一人で話進めてんじやねえよ。そんな話信じられるわけねえだろ。『力』？んな馬鹿げた話があるかよ。『最強』？ふざけんな。そんな話、信じてられつかよ！」

自覚していなかったが、俺は相当混乱していたらしい。

気付いたら震える声で絶叫していた。

本能が感じていた。

自分は引きずり込まれようとしている。

自分の力では抗うこともできないような、巨大で底なしの渦に引きずり込まれようとしている。

危険だと、本能がサイレンをかき鳴らしている。

完全に捕らわれる前に、逃げろと。

カズは俺の絶叫にも動じていないように、じっと俺を見つめていた。

俺はいつの間にか肩で息をしていた。

混乱していると同時に、興奮している。

自分が今まで見たことがない、影の世界に。

「まあ、信じられないのも仕方がないがな」

カズは一つそうつぶやくと、体重を感じていないようにすっと立ち上がった。

「お前みたいな反応は、もう慣れてるさ。初めてこの話をした全員が全員、そういう反応をするからな」

カズはふらりと歩いて、白い棚から適当な包帯を一つ、手に取った。

「信じられねえのはわかる。俺だって最初はたちの悪い冗談かと思った。でもこれは紛れもねえ真実だ。どうしても信じられねえって言うのなら、証拠を見せてやるよ」

カズは包帯を握った手を、俺に向けた。

「よく見とけよ」

ぐ、っと握る手に力が入った。

その瞬間、変化は起こった。

じわり、と泥水が染みたかのように、カズの指の間の包帯が茶色に染まった。そこからしゅう……と一筋白い煙がのぼり、信じられないことにカズの指の間から小さな炎が揺らめいた。

炎は瞬く間に全体に燃え広がる。俺が息を飲んでいる間に、カズの手は勢いのある炎に包まれていた。それなのにカズは、全く熱が燃える様子を見せない。まさに涼しい顔で、手の中で燃え盛る包帯を眺めている。

「どうだ？」

言葉を失っている俺に、カズが問いかける。

「これが『力』だ」

カズは手の中の包帯を床に放ると、いまだ燃え続けるそれを靴底で踏み潰した。

「信じる気になったか？」

そうだ。

もしカズの話が真実だとしたら、両目の色が違うカズは能力者ということになるじゃないか。

「因みに俺の能力は発熱能力だ。体のどこからでも熱を発して、あらゆるものを燃やすことができる。こういう能力だから、俺の体の耐熱は半端じゃねえ」

カズは、『力』を持っている。つまりカズは能力者であるということだ。

つまりそれは、その話が真実であるという証明に他ならなかった。「まだ信じられないか？ 因みに手品じゃねえぞ。んなくだらねえものの心得はねえ」

そりゃそうだ。

カズが手品なんてくだらないもの、習得しているわけがない。

わかっている。

きつとそうなんだ。

世界にはこんな力があって、そんな力を使う人間が実際にいるん

だ。

それが真実なんだと、わかっている。

でも駄目だった。

例えば俺が普通の人間で、どこにでも腐るほどいる高校生だったら、もしかしたらその真実もすんなり受け入れられたかもしれない。でも現実はそのじゃない。

俺の髪はどんな人ごみでも目立つ青銀色で、そして俺の目は誰もが気味悪がった黒と銀の二色で、それが意味するのは自分がそんな力を使える人間で、能力者ということだ。

他人事ならよかった。

でもそれは他人事じゃない。

正真正銘、それは自分のことで、そして自分を引きずり込もうとしている世界のことだ。

信じたくない。認めたくない。

信じればそれは、自分から巨大で底なしの渦に飛び込んでしまうような気がした。

認めればそれは、自分が人間を超えた『力』を持つ人間に、人間ではない人間になってしまうような気がした。

情けないけれども、それはとても怖いことだった。

「信じ・・・・・・・・・・られねえよ・・・・・・・・・・」

今俺がいるのは、どこだ？

「・・・・・・・・んな力持つてるなんて、人間じゃねえじゃねえか」

片足を渦に掴まれて、それを振り払おうともがいてるのか？

「その力が俺にもあるなんて、信じられつかよー!!」

それとももう渦の中に巻きこまれて、翻弄されてるのか？

「俺が・・・・・・・・俺が人間じゃねえなんて、信じられるか・・・・」

認められつかよー!!!」

また、俺は絶叫した。

今度は混乱からじゃない。

・・・・・・・・恐怖からだ。

俺を飲み込もうとする巨大で底なしの渦の形をした、俺の知らない世界に。

沈黙が流れた。誰もしゃべろうとしない。俺に真実を話したカズも、どこか軽蔑したような目で俺を見つめるばかりで、口を開こうとしない。

だからといって俺が何か言おうという気にはなれなかった。

今口を開けばきっと、恐怖に翻弄された情けない喚きしか出てこないだろうと思えた。

「お前は人間だ」

唐突に沈黙を破ったのは、ずっと口を出そうとしなかった鬼だった。

「カズも、今AFOWで『力』を奮っている仲間たちも、みんな人間だ。大体、元々この『力』は人間が持っていた力なんだ。この『力』を持っているということは、言わば個性の一つでしかない。だからお前は、人間だ。人間でないわけがない」

鬼、という印象を持っていたわりには、どことなく優しい声だった。

そのギャップのせいか、その言葉はじんわりと体の内部に染み渡るようだった。

俺の中で渦巻いていた混乱と恐怖がゆっくりと収まっていき、落ち着きを取り戻すことができた。

だがカズはそれが気に入らないとでも言うように、不機嫌な顔でフンと鼻を鳴らした。

「そういうことだそうだ。・・・ま、俺はお前が信じようが信じまいがどうでもいいがな」

ぶっきらぼうに言って、ずっと立っていたカズは再びいすに座った。

「お前が信じようが信じまいが、この話は真実だ。そしてお前が最強の『力』を持ってるってことも、全部本当だ。いいか、よく聞けゼン。今まで十数年間、AFOWはずっとこの真実を隠し通してきた。

た。だがいつこの真実がバレたり、発見されるかわからない。もしこの真実が世間に知られたとしたらその時は、大規模な能力者争奪戦になる。そうとなればゼン、最強の『力』を持つお前を、いくつもの組織が確保しようとするだろう。それこそどんな手を使ってもだ。どんな馬鹿でもどれだけ乱暴な扱いをされるか想像がつくだろう？もしかしたら脅威として永遠に拘束されるか、最悪殺されるかもしれない」

実際にそれを想像して、ぞっとする。

確かに人間を凌駕する『力』があるとなれば、たくさんの組織や政府が、それを獲得しようと躍起になるだろう。

そしてそれは奪い合いになり、やがてはきつと、戦争が能力者狩りにまで発展するに違いない。

『力』は、人を狂わせるんだ。

そして俺はどうなる？

どう転ぼうが、確実に殺される運命だ。

「その時お前が一人だったら、もしくは家族と共にいたら、お前は抗うことなく捕まり、そして共にいた人間にも被害が及ぶ。『その時』のために、俺はわざわざお前にこの話をしたんだ」

家族……緋粹……お袋……

じゃあそれはどうということだ？

俺は緋粹たちのそばにいちゃいけないってことか？

「その時」が来たら傷つけてしまうから、もう一緒に暮らせないってことか？

「真実を信じようが信じまいがどっちでもいい」

顔を上げる。自然にカズの顔が目に入った。

黒と蒼の双眸に目を引かれる。

「俺が言いたいのは最初からこれだけだ」

A F O Wには、そんな人間が、たくさんいるのだろうか。

「ゼン。お前は、A F O Wに入れ」

驚かなかった。

驚くべきところなのかもしれないが、それでも驚く気にはなれなかった。

大体これだけA F O Wの秘密を聞かされて、そのまま放り出すとは思えなかったから、予感はしていた。

「『その時』が来た時、固まって対抗できるように。A F O W全員で、『力』に狂った人間から身を護れるように」

きつと選択肢なんてないんだ。

俺はもう渦に巻き込まれて翻弄されていただけなんだ。

『力』の存在を知ったところから、俺はもう戻れなくなっていたんだ。

「………ったく」

本当に、どうにでもなれ。

「んな話聞かされて、断れるわけねえだろ」

開き直りでもしなきゃ、やってられるか。

「いいぜ。入ってやるうじゃねえかA F O Wってやつに！」

こうなったらやけくそだ。

俺はカズの瞳を睨みつけて、さも自信に満ちて見えるように、高々と宣言してやった。

カズはそんな俺を見て、満足そうに笑った。

「いい度胸だゼン。それでこそ、俺が見込んだ価値がある」

そうして俺はとんでもなく巨大で底なしの渦に、今まで覗いたこともない影の世界に飛び込んだ。

そしてこのとき俺は、「櫻井粹然」を完全に殺した。

それは俺が始めて体験する殺人だった。

相方と会話

A t 3 「強襲」

「これ、護身用な」

そう言っただ渡されたのは、やたら大きくて重いサバイバルナイフ。
「重くて使いにくいってんなら、こっちでもいいぞ」

そう言っただ渡されたのは、刃を収納できて軽いバタフライナイフ。
「……………どなんとこなんだここは？」

結局やけになってA F O Wに入っただ俺は、早速適当な服を着てコ
ンビを組む相方に会いに行くことになった。

その相方のところまで案内してくれるのは鬼——カイというらし
い——だった。

カズはここに残って「その相方にはこっちから連絡入れとく」らし
い。

じゃあ早速行くか、と部屋を出ようとしたところで、カズが二つ
のナイフを投げてきたのだ。

「護身用って？」

「そのまんまの意味だ。もしもの時はそれで身を護れ」

「いや、何で相方に会いに行くだけで護身用のナイフを渡されなき
やならないんだ？」

「もしもの時のためだ」

「もしもってなんだ。」

それを聞いておきたかったが、カズはもうそっぽを向いて煙草を
吹かしてしまったので、聞くに聞けなかった。

「おい。行くぞ」

カイに急かされて、一応二つのナイフを腰のベルトに挟んで部屋
を出た。

部屋を出るとそこは廊下だった。

さっきの部屋と同じで白い。

広い間隔で白い扉が並んでいる。

自動で開きそうな、横開きの扉。機械的だ。

どこも似たような形をしているから、迷ったら出てこれないような気がした。

廊下は先が見えない。長いではなくて緩やかな曲線を描いているからだ。

それと、この廊下には窓がない。

明るいの、天井にずらっと電灯が並んでいるからだ。

「おい。あんまりきよろきよろしてんなよ、みつともねえ」

前を歩くカイが、唐突にそう言った。

あの部屋でかけられた優しい言葉とは似ても似つかなくて、一瞬こいつは本当にカイなのか疑った。

「……なんなんだこいつ……」

意味わかんねー。

思わず前に行くカイの背中をまじまじと見つめた。

白衣を着た白く大きい背中。背は、俺より頭一個分高いくらい。そうする身長は百九十近いのではないか。少し長い後ろ髪が、歩く度首元で揺れている。

後ろからでも首筋からちらちらと見え隠れするのは、カイの第一印象を「鬼」にした百鬼夜行のタトゥー。額から右目、右頬、首筋にかけて、真つ黒なタトゥーが肌の上を蹂躪するように描かれている。それは遠くから見れば火傷でもして爛れているようにも見えるんじゃないかと思った。

カイは両目共に普通の黒だ。つまり能力者じゃない。構成員のほとんどが能力者と言っていたから、一般人も多少混ざっているのだろう。

やがてカイは一つの部屋の前で止まった。だがその扉を開いた時、そこは部屋ではなくてエレベーターだとい

うことに気付いた。

他の部屋と全く同じ形をしてるから、全然わからない。

俺はカズに続いてエレベーターに乗った。

カズが「B2」のボタンを押して、エレベーターが動き出した。

よく見ると「1」と「B1」と「B2」のボタンしかない。

「なあカイ。もしかしてここって……」

「もしかしくなくても地下だ」

カイの答えは簡潔だ。

「ここは、どこなんだ？」

「……？AFOWだ？」

「違う。具体的な住所。とりあえずここは東京なのか？」

カイは沈黙した。

俺に言うべきか悩んでいるのだろうか。

そのうちにエレベーターが地下二階に着いた。カイがエレベーターを出て歩き出したのに続いて俺も歩き出す。

カイはなかなかしゃべり出そうとしない。

もしかしてはぐらかすつもりなのだろうかと疑い始めたところに、カイが「ここは」と話を切り出した。

「ここは東京だ。それ以外は、教えられない」

十分ではないが、答えをもらっただけでもいいと思う。

ずっとここに押し込められるわけでもないだろうし、外に出ればここがどこだかもわかるだろう。

「AFOWはどういうマフィアなんだ？」

「どういう、って？」

「具体的に何やってるかとか、構成員の数とか」

カイはまた沈黙した。だが今度の沈黙は短かった。

「……構成員は、今現在は三十人程度だ。能力者なんてめったにいないからな。他に比べたら、かなり少ないだろう」

カイは歩きながらとつとつと話す。白衣を着てるせいか、どこぞの有名な科学者にも見える。

「A F O Wは戦闘班、サイレントアーミーコレクター 諜報班、デリクター 処理班、オルテイラー 改良班、トリクター 医療班の五つの班に分かれる。戦闘班はその名のとおり暗殺や特攻専門の部隊で、諜報班は情報収集にスパイ。処理班は俺たちの存在がばれないよう、戦闘班の戦闘の跡や目撃者の隠滅。改良班は戦闘班の武器開発など。そして医療班はもちろん負傷した構成員の治療」

五つの班の特徴をざっと説明する。

「ま、他のマフィアには医療班なんてないんだろうが、ここにいる能力者は貴重だからな。簡単に死なれたら困る」

カイの、「貴重」という俺たちをもの扱いしているような言い方にチンと来た。

だがそれを口に出す前にその気配を感じ取られたのが、「怒るな」と先に口を封じられてしまった。

「別に俺はお前らを特別視してるわけじゃねえ。俺も昔は、お前らと同じだった」

「同じ………?」

聞き返してみたが、答える気がなかったのか返事は返ってこなかった。

返ってきたのは、その答えではなく「話を戻すぞ」という淡々とした声。

「五つの班にはそれぞれ頭がいてな。その頭が、各班をまとめる。因みにカズが戦闘班の頭で、俺が医療班の頭だ」

カズが戦闘班のボスというのは納得がいった。

でもカイが医療班のボスというのは、かなり意外だった。

確かに白衣着てるけど。着慣れてる印象は受けるけど。

カイに「医者」というイメージは全く湧かなかった。

「そしてその五人をさらにまとめるのが、我らがA F O Wのボス、楚月だ」

カイが大して強調しないからなのか、ボスの名が出てきてもピンとこなかった。

構成員が少ないといっても、世界規模の争いを起こしかねない秘

密を握ったマフィアのボスなのに。

「お前が入る予定なのは、もちろん戦闘班。戦闘班は例外はあるが、大抵は二人組のコンビを組む。普通戦闘班の仲間でコンビを組むが、中には他の班の構成員とコンビを組む奴もいる。まあ、そこら辺は適当だ。今から会いに行くのは、その相方だ」

相方……。

どういう奴だろう。

「どういう奴なんだ？その相方って奴は」

「女だ」

お………っ！？

「女？」

「何だその反応は」

「だっ………だって女って戦闘班に！？」

「むしろ戦闘班には女の方が多いぞ」

「なにい！？」

「どうも戦闘に使える能力は女の方にしやすいみたいだな。男で戦闘系の能力が出るのは稀なんだ」

カイは大して感心なさげだ。

絶句してる俺が馬鹿みたいだった。

ていうか普通逆じゃないのか。

男の方が筋肉とかつきやすくて戦えるのに、どうして女に「力」がつく？

もしかして男に対して筋肉とかつきにくいから、こっちの「力」が女に優先されるのか？

考えても埒が明かないから、考えるのを止めた。

「さてと、ゼン」

前に行くカイが立ち止まった。

「ここだ」

カイが指差した先。他と全く変わらない、自動ドアみたいな白い扉があった。

転がった。

髪の毛を掠めて、三本のスローイングナイフが壁に突き刺さる。避けてなかったら脳天一撃だ畜生め！！

ひざをついた状態でナイフを抜く。

軽くて使いやすい、バタフライナイフの方だ。

こっちの方が扱い慣れてる。

ザ、と目の前で細い足が床を踏んだ。

唐突だった。

人間がこんなに早く移動できるわけが………っ！

「く………っ！！」

ダン、と。

俺は壁に叩き付けられた。

「………ん？」

肩で切りそろえられた、紺に近い黒髪。

怪訝そうな色を映した、紅と蒼の双眸。

「あれ？ユオウじゃない？」

確かに女だった。

そしてこいつはきっと、俺の相方を務める女だろう。

「男？誰あんだ？」

よくこいつ、そんなに平気でいられんな。

壁に叩き付けられたって言っても、ただじゃ転ばない。

俺の左手は首を掴もうとしてきた女の手と俺の首の間にあるし、

右手は握ったバタフライナイフを女の首筋に突き付けていた。

五年のブランクにしては、完璧。

「てめえの相方になる新人」

その言葉に、女の顔色がさあ、と青くなった。

「……でした」

殺意を匂わせてにつこりと笑ってやった。

女は青い顔色のまま固まっていたが、すぐににつこりと笑みを返してきやがった。

「……………宜しくねゼン！」

「人の事殺しかけて宜しくするもんか今帰るすぐ帰るぜってー帰る
！……！」

女を突き飛ばしてナイフをしまつて足音荒く扉へ向かう。

「違うのよてつきりユオウあたりが奇襲に来たのかと思っちゃった
のよごめんなさいごめんなさいごめんってば」

「うるせえこれどうやって開けんだ畜生！！」

白い扉に一発蹴りを入れると、ピー、とここに来たときと同じ音がして扉が開いた。

そしてその向こうにいたのは。

「よつ。無事だったか」

むかつくほど能天気な声と共に現れた。

「カYYYYYYYYYYYY！！！！」

カイだった。

「てめえおい殺されかけたんだぞという神経してんだこいつ！！
！」

「死ななくてよかったなあゼン。俺の祈りが天に届いたか」

「話を聞けええええええええ！！！」

絶叫した俺の耳に、ピーという音が届いた。

「……………あの」

それとほぼ同時に、少し控えめの小さな女の声が聞こえた。

「何、してるんですか？」

「あ、いらつしゃい。ハクユ」

開いた扉の向こう。胸元に紙袋を抱えた、小柄な女がそこに立っていた。

外跳ねの琥珀色の髪が印象的で、その瞳は女——レイというらしい——と同じ蒼と紅だった。レイのそれとは、瞳の色が逆だが。

歳は……………どうだろう。背の割には大人びた顔をしているから、俺と同じぐらいに見えた。

それとその女の左頬。左頬から首筋にかけて、ひし形の水晶のよう

な、水晶の鱗が浮き出ているような、そんなタトゥーが彫ってあった。そしてそれは女の美貌も相まって、何故か俺に人魚姫を連想させた。

その小柄な女は俺のことを一瞥して。

「あの、おいしい和菓子買ってきたんで、一緒にお茶しません？」

見事に無視した。

見慣れないはずの俺の姿に、何の反応も示さない。

「カイさんも、そのあなたも」

訂正。無視したわけではなさそうだ。

ただ、反応がやたら薄いだけで。

「いいわね。じゃ、私の部屋でお茶にしましょ。丁度私のところにもいいお茶が入ったのよ」

レイが、胸の前で手を合わせてにつこりと笑った。

A t 4 「相方」

通されたレイの部屋は、どこにでもありそうなマンションの一室のようだった。

パワード式の自動ドアをくぐると、右手奥が流し台やコンロになっでいて、反対の左手奥の角にはテレビと、その横に本棚。本棚の上には置時計と化粧品らしきものが所狭しと並んでいる。その手前にはテーブルと椅子が四つ。

それら家具一式は、本当にどこにでもありそうなマンションの一室を連想させた。

だが相変わらず壁や床が白いせいで、それらはどこか浮いているように感じ、現実味が無い。

そして俺達四人——レイ、ハクユ、カイ、それに俺——は、四つの椅子に座ってレイが淹れてきたお茶と、ハクユが持ってきた和菓子を味わっていた。

バタフライナイフは俺の腰に戻り、俺の頬には絆創膏が張ってあ

る。

さっきの不意打ちで、ナイフがかすった傷だ。

その傷をつけた張本人のレイは一口二口お茶をすすって、初対面の俺達の紹介に入った。

「彼女はハクユ。私たちと同じ戦闘班の仲間よ」

「……よろしく」

小柄な女、ハクユは小さな声で小さくお辞儀して挨拶をした。

俺も一応お辞儀を返す。

「こっちはゼン。今日入ったばかりの、新人だつて」

「……よろしく」

ハクユも、俺と似たようなお辞儀を返した。

「ゼンは、私とコンビを組む相方よ」

レイが俺を紹介すると、ハクユは伏せ気味だった顔を上げてレイを見、俺を見た。

「この人は、何日持ちますかね………?」

「あ?」

「それはだな」

ハクユの言葉を図りかねた俺に、一人淹れたてのお茶をすすっていたカイが説明を入れてくれた。

「お前も体験した通り、レイはいつでもナイフを振り回すからな。

お前みたいな新人を相方にしてもすぐに辞退しちまうんだよ。因みに最長記録は三日だ」

「みつ………!??」

「ユオウの記録ですよね」

ハクユがぼつりとつぶやき、ああ、とカイが同意した。

「ま、最初はユオウも自信満々で相方を買って出ただけだな。案の定三日後に泣き泣き相方辞めるって言い出したんだつたか」

「だって強くないと私の相方務まんじゃないじゃん?」

へらつと笑って何の反省の色もないレイ。

こ………つこんな危険な女だったのか………

!!!!

ホントに、殺されなくてよかった………!!!!

「あ、おいしー」

俺の恐怖も露知らず。

レイは呑気に茶をすすり、あんころもちに舌鼓を打った。

「ハクユ、これどこで買ってきたの？月見亭？知らないなあ。どこにあるの？」

和菓子が入っていた紙袋の店舗名を見て、レイはハクユにそう尋ねた。

「ラクトが、この人と仲がいいから、ラクトに聞いたほうが………」

ハクユがつぶやいた時、ごんごんと鈍い音を立ててドアがノックされ、直後ドアの自動ロックが解除され、扉が開いた。

扉の向こうに背が高い男の姿が見えたとき、俺の目の前でレイはスローイングナイフを取り出して、その男に問答無用で投げていた。「な!？」

俺が声を上げたときにはもう、ナイフは俺の鼻先を掠めて傾げた男の首の真横を貫いていった。

もし首を傾げてなかったら、ナイフは男の眉間に突き刺さったことだろう。

だがたった今殺されかけたというのに、男は何事も無かったのように入ってきた。

「今日は投げるのが遅かったね、レイ」

「客がいたから」

そしてレイと、何事も無かったのように言葉を交わす。

「相方が三日で逃げる理由がわかったろ」

絶句する俺に、カイは親切にもポツリとささやいてくれた。

「こんなのが日常茶飯事だからな。俺たちはもう慣れて楽に避けられるけど、くれぐれも殺されないようにな」

最長記録が三日というのが、とてつもなくよくわかった。

会ったたびに殺されかけるとなれば、もう二度と会いたくないと思うのも道理だ。

「あれ？新人？」

男は見慣れない俺に気付いて、俺の顔を覗き込んできた。

俺と同じ歳かそれ以上の青年だった。

俺と似ている、青みがかかった灰色の髪を無造作に伸ばし、その上にバンダナとサンバイザーをしている。瞳は紅と黄の二色で、それは「仲間」の証明だった。

「ああ、私の相方になる新人よ。ゼンって言うの」

レイはすかさず青年にも俺を紹介した。

俺はあまり他人としゃべるのは苦手だったから、しゃべらないでいい分レイに少し感謝したい。

「ゼン、こっちがラクト。ハクユとコンビ組んでる人よ」

レイは俺にも青年のことを紹介してくれた。

「ゼン、か。俺はラクト。よろしく」

青年、ラクトは俺に手を差し出してきた。

握手を求められている。

「レイの相方とは災難だったね」

その骨ばった手を握ったとき、ラクトは俺にそう小さくささやいた。

「ま、死なない程度にがんばれ」

きつと青くなっている俺の肩をポンと叩き、ラクトは予備の椅子を引っ張ってきてハクユの横に座った。

「で、ラクトあなた、ここに何の用？」

「ん？いやハクユがここにいて聞いていたから、迎えついでに遊びに来たの」

ラクトはテーブルの上に広げられている和菓子の箱の中から、鈴カステラを一つ取って口に放り込んだ。

「ここの和菓子お勧めだよ。因みに俺が一番好きなのは鈴カステラ」
カラカラと笑うラクトは、ハクユの湯飲みを取ってお茶をすすっ

た。

いいのかな・・・と思ったがハクユが何の反応も示していないので、わざわざ言う必要も無いだろう。

コンビを組んでるそうだし、その程度には打ち解けた仲なのだろうと解釈する。

「さて、と」

不意に、俺の横に座っていたカイが湯飲みを置いて立ち上がった。

「そろそろ俺は退散するぜ。後は若者同士仲良くやんな」

「え、まだ居てくれたっていいじゃない」

「俺はお前ら若者と違って忙しいんだよ。大人は大変なのだ」

カイは頭をかきつつ扉に向かった。

「ツと、そうだゼン。すぐ戻ってくるから、それまでここで待ってるよ」

ゆつくりと開く扉を背景に、カイは振り返ってそう言った。

「殺されないようにな」

そう言うのも忘れずに。

「やっだなあカイ。冗談止めてよ」

レイは笑いながらそう言ったが、俺には全く冗談には思わなかった。

ほんとレイにはいつでも警戒しとこう。

カイが去って、ふと俺は疑問を持った。

「カイって・・・幾つなんだ？」

そういえばカイのみならず、この誰も年齢を知らない。そればかりじゃなく素性も、本名すら俺は知らない。

「カイ？確か二十九って言ってた気がするけど・・・ああ、そういえば私たちも教えてなかったよね」

レイは俺の疑問に答えるべく、自分の胸に手を当てた。

「私は十九歳。ハクユが十七で、ラクトは十八。ゼンは？」

ということはこの中ではレイが一番年上ということになるのか。ハクユとラクトは納得できるが、レイはどうも違和感があった。

十九歳には見えない。もつと年下の十五ぐらいに見える。とりあえず俺より年下に思えた。笑顔が幼く見えるからだろうか。

「……俺は、十六だ」

俺が一番年下だということが気に入らなくて、慥然として言った。「へえ、じゃあゼンが一番年下なんだ。もうちょっと大人に見えたけど」

「そうか？俺はそのくらいの年だと思ったけど」

さっきまでゴマようかんをかじっていたラクトが、それを飲み込んでから言った。

「いつも険しい顔してるから、老けて見えるんじゃないですか」

ハクユのポツリとこぼした呟きに、ラクトはブ、と吹き出す。それに少しだけ怒りを覚えた。

「………ラクト」

そのラクトに、ハクユが声をかけた。

「そろそろ、『あれ』始まっちゃうよ」

「ええ！？今何時！？」

「二時五十五分………」

腕時計を覗いたハクユの腕を乱暴に掴んで。

「やばいぞハクユ早く帰ろう！！」

DVDセットしてないのに……！という悲鳴を残して、ラクトはあつという間に部屋を出て行った。その間際聞こえた「また今度ねっ！」という声は、引っ張られていったハクユのものだろうか。

「………何？」

まさに嵐のように去っていった二人を呆然と見送って、俺は何とか声を出した。

「………えっと、毎週水曜午後三時からの『肉食帝国』っていうアニメ。それ、ラクト毎週DVDに撮ってんの」

半ば呆れ顔のレイの説明に、きつと俺も呆れた顔をしていたと思う。

「………ここって地下だろ？電波入るのか？」

「特別な回線で入れてる。ここは普通のマンションと変わらないよ」
携帯も普通に使えるしね。と言ってレイは残ったお茶をぐいっと飲んだ。

「ゼンもすぐに部屋を与えられると思うよ。カイはそれを手配しに行ったの」

空になった湯飲みを置いて。

「さて、お客さんも帰ったことだし。ゼン」

レイは立ち上がった。

「早速訓練しようか」

「は………!？」

訓練？なんでいきなり？

「は？じゃないよ！戦闘班の一員なるもの常日頃体を鍛えてないとあつという間に殺されちゃうよ!!」

その前にレイに殺されそうな気がバシバシするんですが。

「大丈夫よ！最初は殺さないように体術からだから!!」

俺の心を読んだかのようにそう言って、レイは俺の腕を引いて立たせ背を押して部屋から出した。

部屋を出た先は、さつき殺されかけた、レイの遊び場。

二十畳近くはあるんじゃないかと思える、道場みたいな広い空間だ。でもやっぱり壁も床も白いせいで、現実味の無い空間に思えた。「じゃ、言った通り最初は体術ね。ゼンは男の子だから私のこと殴りにくいと思うけど、私は平気だから遠慮なくどうぞ」

「言われなくとも」

レイ相手に遠慮なんてしてたら殺される気配がぶんぶんした。

ここは男気無いだろうが本気で行かせてもらおう。

レイは徒手空拳の構えを取った。中国武術に、多少のアレンジを加えた感がある。

構えを取り、腰を落としたレイの顔から、ずっと笑みが消えた。ぞくりとした寒気を覚えた。こういうのを戦慄というのだと、本能的に悟った。レイの顔には、冷たい刃のような殺気が浮き出ていた。

笑みが消えた顔は、十九歳という年相応の雰囲気があった。

本気だ。遠慮したら殺されるという俺の予感、当たってたわけだ。頬を汗が伝った。一歩間違えば、どうなることか。

俺も徒手空拳の構えを取る。昔習った、古武術の構え。近所に自称古武術の達人がいたから、幼いころに半ば遊びで習ってみたのだ。それが案外面白くて、本格的に五年ほど習った。

高校に入ったのをきっかけに止めたが、ブランクは半年ほどだ。今まで喧嘩でも使っていたし、たぶん通用するだろう。

「いくよ」

短い、レイの開始の合図。

レイが動いた。とんでもなく速い。近所の師匠と比べ物にならない。

あっという間に目の前に迫ってきたレイに、思わず一歩引いた。

「駄目!!」

直後鋭く飛んだ声と同時に、鞭のように振り出したレイの手の甲が鼻頭に入った。

踏み出しの勢いと手首のスナップが無駄なく活かされた、簡単な技のくせに威力のある一撃だった。

ホントに言葉どおり、一歩退いただけでは駄目だったことを思い知る。

「っこ、の!!」

鼻の奥からどろりと液体が垂れてくるのを感じながら、それを気にする暇も無く拳を繰り出した。だがその一撃はあっさりとレイの右頬の横をすり抜け、直後俺の右頬にレイの蹴りが叩き込まれた。

首がぐき、と嫌な音を立てた。

「負け!!」

そして仕上げとばかりに顔面に掌底が入って、俺はひっくり返って仰向けに倒れた。鼻からたら、と鼻血が垂れたのがわかった。

「容赦ねえな」

あっという間に決まった——時間にしたら五秒ぐらいだろう——

勝敗に不満を上げると、レイは倒れたままの俺を見下ろして、クス、と笑った。

「このくらい対抗できなきゃ、私の相方は務まらないのよ」

「……言うな」

俺は鼻血をぬぐって、体を起こした。

するとレイはポケットからハンカチを取り出して、汚れるのも構わずに俺の鼻に押し付けた。

「でも今まで学生だったにしては、いい動きしてたよ。私の動きも把握できてたみたいだし、ユオウを除けば一番強いよ、ゼンは」

ユオウには負けるのか。と思ったが一応は褒められているから文句は言わなかった。

「総合評価は、三十点ってとこだけどね」

そのとき俺は、鼻に押し付けられたハンカチの匂いと優しそうなレイの笑顔に、少しだけ警戒を緩めていたのを知った。

A T 5 「会話」

「………なあ」

「なあに？」

「今、何時だ？」

「五時三十二分よ」

俺は、ボタンとレイから借りた本を閉じた。

「カイ、すぐ帰ってくるって言ったよな」

「言ったね」

「すぐっていうのは、二時間と三十分を表すのか？」

カイは、五時三十二分になっても戻ってこなかった。

「しょうがないなあ」

レイは読んでいた本を閉じて、立ち上がって伸びをした。

「今日はカイが来るまでここにいなよ。夕飯作ってあげるから、食べきな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

世話になるのは癪だったが、これはカイのせいなので気にしないようにする。

レイは冷蔵庫の中身を確認して、適当な野菜を取り出した。

「・・・・・・・・・・あ、手伝うよ」

俺はまな板を出して野菜を切り始めたレイをぼんやりと眺めていたが、何もしないで食い物にありつくのも気が引けたので、俺もレイの横に立った。

「ああ、いいよ別に」

「こっちはよくねえんだよ」

「・・・・・・・・・・じゃあ後片付けはゼンがやってよ。作るのは私がやるからさ。ゼンはテレビでも見て待ってて」

「・・・・・・・・・・わかった」

そう言われては引き下がるしかなく、俺はしぶしぶ椅子に座った。料理の腕を疑われたのだろうか。

こう見えても結構晩飯の手伝いはしてるし、俺一人で作ることも決して少ないわけじゃない。調理実習の授業でも、俺のフライパン捌きに同じ班の奴らから歓声が上がったことだってある。

授業、と考えて気分が少し暗くなった。

俺はもう、学校に行くことも無いんだな。

別に親しい友達がいるわけでもない。いるのは俺を敵視する不良グループだけだ。悲しむ必要なんて無いのに。

でも、それでも、学校は「日常」の一つだった。

もう二度と戻ってこない、日常の。

「・・・・・・・・・・なあ、トイレってどこだ？」

情けない。

らしくもない。

戻ってこないものを惜しむなんて。

でも俺がいるのは「表」の人間が想像もしないような「裏」の世界。

そして俺はその「裏」の世界にしか生きられなくなってしまった。
「表」の世界を懐かしむのも、たまにならいいだろう。

俺はレイに教えてくれたトイレへ向かった。

レイが作ってくれたクリームシチューを二人で食べて、俺は約束通り後片付けをして今流し台で皿洗いをしている。

レイは「じゃ、私お風呂に入ってくるからあとよろしくね!」と言いつつ奥の扉へさっさと消えていってしまった。

さっきトイレに行ったときに見たが、この扉の向こうは廊下になっている、寝室と浴室とトイレの三つの扉がある。何故それを知っているかというと、トイレの場所がわからなくて全ての扉を開けたからだ。

皿洗いといつても二人分しかないのですぐに終わってしまった。
ぬれた手を拭いて、さっきからニュースを流しているテレビを見た。

俺はもともテレビを見るほうじゃない。たまに見るものもあるが今日はそれが無い。だからと適当に見ていると、しばらくしてトイレに行きたくなった。

どうせ見るものも無いのでテレビを消して、奥の扉をあけて廊下に出た。ここの扉まで横開きの自動ドアだ。ボタンを押して開く仕組みになっている。

なんかこだわりでもあるんだろうか。

扉の向こうの廊下は曲がっていて、突き当りの扉が寝室だったはずだ。曲がって一番奥がトイレで、その横の扉が浴室だった。

だがその前に、さっきまで無かった青いカーテンが引かれていた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・?なんだこれ?」

そして俺は大して考えずにそのカーテンを開いた。

そして一生忘れないようなイベントが、その先に待っていた。

「ゼッ・・・・・・・・・・・・・・・・!?!」

「?」

俺の目に最初に映ったのは、白い腕だった。

よく見ればそれはほんのり赤く上気していて、そこから熱が蒸気となって逃げていつていた。そしてそれはレイの腕だということに気付いた。

「レイ・・・・・・・・？」

ホントにさつさと今最も大切なことに気付けばいいものを、俺はそのときどこまで鈍感だったんだろう。

レイはバスタオルで胸元を隠した。

なんでだ？と思ったときやっと、俺の目にレイの裸体が映った。

紺に近い黒髪はしつとりと濡れて、白い肩に水滴を落としている。バスタオルは胸元から太もものあたりまで隠していて、そこから伸びる白い足は細く、それでも力強さを感じる綺麗な脚だった。

ああ、綺麗だなあ・・・・・・と見入ってしまったそのときの俺は、きつと危機感知能力がゼロだったんだと思う。

「ッ・・・・・・・・ゼエエエエエエエエエエ！！！！！」

「？」

レイの絶叫が響き渡り。

そして俺の意識は、顔面にとんでもない衝撃を受けたことによってあの世に吹っ飛びかけた。

鼻の骨が折れなくてほんによかった。

俺はレイの次に風呂に入って、さっき俺が間違って開けたカーテンの中で着替えた。借りたバスタオルで水滴を拭き、手早く着替えてナイフも腰の同じ位置のぶら下げる。

レイが言うには、ここの浴室はアメリカ式なので脱衣室が無いそう。俺が浴室を覗いたときも確かに無かった。レイは湿気が残る浴室で着替えをしたくなかったので、浴室の外の廊下にカーテンを引いていつもそこで着替えをしているらしい。

そして俺は今日、それを知らずにカーテンを開けて、レイの着替えと鉢合わせするはめになったのだ。

「別に言い忘れた私も悪いんだけどさ」

着替えを終えて、不貞腐れた顔でテレビを見ていたレイに改めて謝ると、レイはまだ不貞腐れた顔でそう言った。

「何も見てないから」

「あんなにじろじろ見てたくせに？」

そう言われると加害者の俺は何も言えない。

「悪かったよ」

「……ま」

レイはテレビを消して立ち上がった。

「許さないってわけにもいかないし、何にも見てないって言うのを信じて、許してあげましょ」

もうこんな時間だしね。とレイが時計を見て、俺もつられてそれを見た。

十時二十分。しかしこんな時間になってもカイは全く帰ってこない。

「カイ、結局来なかったね。しょうがないから今日は私のところで寝な。床で寝ることになっちゃうけど」

「わかってる」

九時を過ぎたあたりから、その程度の覚悟はしていた。最悪、身一つだけで廊下に放り出されても、まだ本格的に寒くなってきたというわけではない今なら死にはしないだろうと、そのくらいのことば考えていた。

ましてや俺はレイの機嫌を損ねてしまったわけだし。

だからとりあえず部屋の中に入れてもらえているだけでも、正直ありがたかった。

レイは俺を寝室に招き入れた。寝室の奥にはパイプベッドが一つあり、その反対側には大きな本棚が並んでいる。扉の横にあるのはクローゼットか。

レイはクローゼットを開けて、中の毛布を一枚俺に投げた。

「ごめんね。今は予備それしかないの。寒いかもしれないけどそれ

で我慢して」

そして申し訳なさそうな顔をする。

いやいや抜群にいい待遇ですってレイさん。

「いや、これで十分すぎるぐらいだ」

そう言つと、レイは「それはよかった」と微笑んだ。

「・・・なんだ、こんな顔もできるんじゃないか。

「じゃあ、電気消すよ」

そう言われて俺は毛布に包まって、ベッドの横に腰掛けた。冷たいことを覚悟していた白い床は、案外暖かくて少しびっくりした。

腰のナイフが少し邪魔で、外して傍らに置いた。

すぐに電気が消え、辺りは真っ暗になった。

地下だから、月光も届かない真の闇になるんだ。

闇の中でレイが移動して、ベッドに入ったのがわかった。夜目が利くのだろうか。視界が無くて足元がおぼつかない感じが全くしなかった。

レイはしばらく衣擦れの音を立てていたが、そのうち止まり無音の闇が降りてくる。

そのうち俺の目も闇に慣れてくる。そうすると今までの名残が、電灯がほんのり微かな光を放っていることに気付いた。

レイはこれを頼りに歩いたのかな？

「・・・ねえ」

不意に、レイがベッドの中から話しかけてきた。

「・・・起きてる？」

「・・・ああ。・・・どうした？」

すると少しだけ沈黙が返ってきた。

「・・・あのさ、別にゼンを責めてるわけじゃないんだけど、私本当はもつと遅い時間に寝るの。今日はゼンがいるから早いだけで」

「・・・で？」

責めてるわけじゃないと言ってるからには、責めてないのだろう。

「で、いつもより早くて眠れないから、何かお話して」
「・・・・・・・・・・どのガキだ？寝る前にお話って。」

少し呆れたが、こつちも少し話したいことがあるから口を開いた。
「・・・・・・・・・・お話っていうよりは、俺の聞きたいことになるが」
「うんいいよ。私に答えられることなら答えてあげる」

レイの顔はここからじゃ見れない。でも微かに笑っていることが、
何故かわかった。

「レイ、お前は どうして、ここに居るんだ？」

レイが、息を呑む気配が伝わってきた。

何か俺はやばいことを訊いたか？でもやばいことは訊いてないはずだ。このままだと答えてもらえそうに無かったから、言葉が続けた。

「お前はここに来る前はどこに居たんだ？どういう経緯で、ここに入っただ？」

「・・・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

レイは少し沈黙して、それから口を開いた。

「私は、物心ついたときにはもう、ここに居たの」

「あ・・・・・・・・・・！」

まずいことを聞いた。追求しないでいればよかったものを。

「あ・・・・・・・・すまない・・・・・・・・」

「何で謝るの？ゼンは悪くないでしょ」

レイの声にもう陰は無い。冗談を言われて笑っているようにも思えた。

「私、両親に捨てられてたんだって。きっと、この目のせいで。そこをこの組織の人に拾われて、ここで育ったの。だから私は、『表』の世界を知らない『裏』の世界の住人なの」

何の悲しみも辛さも無い、綺麗な声だった。

「ゼンは今まで学生だったんでしょ？家族とか、いるの？」

「・・・・・・・・・・ああ」

家族。ほんの三日前までは、あって当然だった大切なもの。

「お袋と妹が一人。それに俺で、三人家族だった」

「……お父さんは？」

「五年前に出てった。それからずっと帰ってこない」

親父は、俺が十一のとき出て行った。

親父には、親父らしいことをしてもらった記憶が無い。俺に受け継がせたいものは全部叩き込み、気が済んだところで全てを放り出して出て行った。

構ってもらえなくてもお父さんお父さんと後ろをついて回っていた緋粹は、わんわんと泣くに泣いた。お袋もしょうがないと言って笑っていたが、陰でこっそりを泣いていたことを俺は知っている。

だから親父は嫌いだ。

何でもかんでも押し付け、用が無くなればたとえ家族だろうとすっぱり切り捨てる。

遠い記憶の中にいる冷徹な親父の顔を思い出すたび、俺はすぐにでもその顔を殴りたくなる。だけど俺の拳は、遠い過去には届かない。

「将来の夢とか、あったの？」

「ない。この先何をするかなんて、考えるのは億劫だったから」

「あはは。ゼンらしいね」

どういうところが俺らしいのだろう。

将来の夢が無いことか。先を考えるのが億劫だということか。

「……ここで育ったってのは、どんな感じだ？『表』の世界を知ったとき、どんな風に感じた？」

「うーん……。そうだねえ……」

レイは少し考えるように沈黙して、それから口を開いた。

「びっくりした。初めて一人で『表』の世界に出たのは十歳くらいだったんだけどね。声かけてきた男の人を殴ったら、周りの人がみんな騒ぎ出して。『こんなので何で驚くの？』って感じで、すごい不思議だった。それに殴った男の人でもぜんぜん弱くて、『人ってこんなに弱いんだ』って、ちょっと絶望感に似たものを感じた」

言葉の前半は、声かけてきただけの男を殴ったことに真面目に呆

れた。でも後半は、どこか悲しい響きの声と、絶望感という言葉に少し同情を感じた。

レイは一緒だ。生まれたときから、もうすでに他の人とは違う。

レイは育ちでさえも、全く違う。

十歳の——幼いころのレイは、その事実を突き付けられてどれほど傷ついたことか。

自分は「普通」の世界とは違うところにいる。

そして自分はもう、その「普通」の世界には入り込むことができないのだと、思い知らされる。

その辛さを、俺は知っている。

俺も、いつからか自然に悟っていた。

自分から離れていく人々を眺めているうちに、あいつらと俺は違う。俺はあいつらの世界とは、違う世界の住人なんだ。と。

「ゼンは、どうだった？ そんな目で、そんな髪で、『表』の世界に生きてきて」

「……最悪だぞ。こんな目してるだけでも相当気味悪がられるっていうのにな。こんな髪までついてきやがって。……ほんと、嫌になるよな。誰も気味悪がって、俺に近づこうとさえしない。友達も、一人もできなかった」

愚痴だ。情けない。女に愚痴を聞かせてしまうなんて。

「おまけに先輩たちにはよく絡まれるし、めんどくせーっただらありやしない。おかげで古武術の練習が毎日できて、腕がなまる心配がなかったよ」

幼いころはよく泣いてたっけ。

そんなことを思い出して胸糞が悪くなる。

古武術を習い始めたのも、興味からだけでなく自分の身を護るためだったのかもしれない。

「……ここは、そういうやつらの、集まりなのか？」

能力者をかき集めて構成されたマフィア、A F O W。

つまりそれは、「表」の世界に居られなくなった者の、集まりな

のだろう。

「・・・・・・・・・・まあね」

レイは軽くうなずいた。自分もその一員なのに。

「ここに居る人たちは大体世間のはぐれ者。ま、よそから見ればはぐれ者が寄せ集まって、傷の舐めあいでもしているように見えるんでしょうけど」

皮肉ったレイの言葉に、反論する気にはなれなかった。

俺は黙っていた。どうにも、しゃべる気になれなかった。

「だからここに居るのは、能力者だけじゃない。私みたいに捨てられて、ここに拾われて育った人もいる。『力』は眼球移植で手に入る事ができるから、そういう人は大体眼球移植して、『力』を手に入れる。育った家の・・・・・・・・大切な場所の・・・・役に立ちたいから・・・・・・・・」

ああ。レイや、ここに拾われた人たちにとって、ここは「家」なんだ。

そしてここに居る全ての人たちが、護りたいと思う「家族」なんだ。

・・・・・・・・俺もいつか、そう思える日が来るのだろうか。

「任務とか、とっても怖いときもある。本当に、死にかけたときだつてあつた。『裏』で生きるためにはいつも命がけだけど、でも私はここが好き。『表』の世界には混じれないけど、ここにはたくさんの人が居るもの」

レイの声はどこまでも真摯で、純粹で、俺が今まで見てきた人間の中で、一番意志のこもった声だった。

「裏」の世界は常に命がけで、闇に満ちていて、とても恐ろしいところだ。

俺はこれから「裏」でやっていけるのか、本当に不安だ。でも。

レイが本当に「裏」の人間なのか、それだけが信じられなかった。

組織 A F O W

A T 6 「組織」

「よう、ゼン。遅くなって悪かったな」

レイが投げたナイフをよけたカイは、続けて俺の投げたフォークもよけた。

「遅ええ!!」

「うるせえ」

今、実に八時四十三分。カイは約十七時間四十分も、俺のことをほったらかしにしてやがった。

俺とレイは朝食中。レイが作ったベーコンエッグと茹でたソーセージを食っているとき、やっとカイが戻ってきた。

「しょうがねえだろ。てめえはやたら特殊なんだから、手配に手間取ってよ」

カイは面倒くさそうに俺の隣に座って、俺のコーヒーを飲んだ。

「ぐ・・・・・・・・て、お前・・・・！これは甘すぎだろ・・・・・・・・」

！！

ミルク二杯と砂糖五杯を突っ込んだ茶色いコーヒーに、カイは顔をしかめてカップをつき返してきた。

「人のコーヒー飲むからだろ」

カイがつき返してきたコーヒーをすすって、程よい甘さに舌鼓を打った。

俺の女並みの甘党は昔からだ。

「・・・・・・・・で？俺の手間取った手配はついたのか？」

「ああ。ボスのほうにも話は通したし、部屋も用意できた。あとタトゥーを彫れば、お前は正式な A F O W の一員だ。おめでとう」

「タトゥー？」

「……ああ。そういえばこの話はしてなかったか」
そう言つとカイは、自分の右頬のタトゥーを指した。

例の、墨がのた打ち回っているような百鬼夜行のタトゥー。

「このタトゥーはな、『オロドジウム』っていう未知の物質を混ぜた墨で彫られてる」

「……………うん??オロド……………なんだって?」

一発で理解できない俺の頭が憎い。

いやでもこれだけ訳のわからない話をされて、一発で理解できないのが普通なんだろうが。

「オロドジウム。A F O W発足……………まあ二十年ほど前に発見された、世間には未公開の物質だ。俺らの『力』と同じで、A F O Wが世間に隠している」

「何で隠してんだ?そんなにやばい物質なのか?」

「……………いや。これは何の変哲もない、鉄なんかと一緒にだ。これを隠しているのはA F O Wの勝手だ」

カイは不意に白衣の内ポケットから煙草を取り出して、一本とつて火を点けた。

「A F O Wの構成員は、入るとき必ずオロドジウムを混ぜた墨でタトゥーを彫る。何故ならそれが、この地下アジトに入るときのパスになるからだ」

うまそつに煙を吸つて、吐く。

煙草をそんなにうまそつに吸える神経がわからなかった。

「ここの唯一の入り口にはオロドジウムを感知するゲートがある。A F O Wの構成員ならタトゥーに含まれてるから通れるが、外の世界に当然オロドジウムはないからな。侵入者があればすぐにわかる……………なかなか便利な仕掛けだろう」

なるほど。それなら「力」同様外にもらすわけにはいかない。

「……………まあとりあえず今日はボスに会つて、タトゥー彫つて、部屋の整理だな」

指を折々言うと、カイはレイのコーヒーを取って飲んだ。

「ふう。やっぱりコーヒーはブラックだな」

カップをテーブルの上に戻して、カイは立ち上がった。

「とりあえず俺は部屋に戻る。お前それ食い終わったら俺の部屋・・あぁ、A-5に來い。入室パスは『takehiro』だ。それからここを案内してやる」

カイは煙草を首から下げた携帯灰皿に押し付けて、バタバタと部屋を出て行った。

「・・・・・とりあえず」

俺はカイを見送って、レイに振り返った。

「A-5ってどこだ？」

「案内してあげるよ」

レイはくすつと笑って、その唇にベーコンを運んだ。

「ここは知ってると思うけど地下一階二階に分かれててね、地下一階がA、二階がBって分けられてる」

朝食と後片付けを終えて、俺とレイはどこまで行っても同じ景色の白い廊下を歩いていた。

「一階ごとに二十ぐらい部屋があつて、一階の半分は大体武器庫になつてるの。部屋数は発足当時から変わってないけど、今は構成員の部屋と武器庫等でほとんど埋まって、空き部屋はほとんど無い」

近く増設することになるかもね。と笑い、レイは部屋の・・・・・じゃなくてエレベーターの扉を開いた。

「・・・で、カイの部屋はA-5だから、地下一階の、エレベーターを出て右に四部屋目」

「B1」のボタンを押して、エレベーターが動き出す。

「・・・・・タトゥーって、レイも彫ってんのか？」

聞かされたタトゥーの話が気になって、俺はレイにそう聞いてみた。

「ん？私のタトゥー？見たい？」

黙ってうなずくと、レイは黒のパンツの裾をまくった。

白い太ももの横。黒い梵字のタトゥーが、縦に一直くるぶしあたりまで彫ってあった。

「………梵字か？楽しい趣味だな」

「何よ楽しいって」

エレベーターが地下一階に着いて、俺とレイは白い廊下に出た。確かエレベーターを出て右に四番目……。

そうしてA-5の部屋に着く。カイの部屋だからといって他のと全く変わることの無い白い扉。

「パス、takehiroだっけ」

レイは扉脇の、パスワードでも入れるようなところ……パソコンのキーボードを小さくしたようなそれに、慣れた手つきでパスワードを打った。

俺の家にはパソコンなんて無かったから、レイのようにキーボードを速く打つことはできない。

パスワードを感知した扉が自動で開き、一応俺はナイフが飛んできてもよけられるように軽く身構えた。

だがナイフなどが飛んでくることも無く、扉は全て開き切る。

その先はレイの部屋と同じように、道場のような白い遊び場が広がっていた。レイのように戦闘の跡が目立っているようでもない。

「じゃ、私はここで邪魔するね。………いろいろ、がんばってね」

「待てその間はなんだ」

若干哀れむような表情を見せて間をおいたレイに詰め寄るが、レイはおほほほと不自然な笑い声を残して去っていったしまった。

俺、ここでの扱い最悪じゃねえか………？

ふとそう思うが………気のせいだ！と無理やり思い直して気を奮い立たせた。

どうせここに入る決心したときから自棄なのは変わらない。

俺は遊び場の中に入って、奥の扉をノックした。一応また警戒心

を強め腰のナイフに触れた。

すぐに扉が開き、やっぱりナイフは飛んでこなかった。

考えて見ればカイは医療班なのだから、武器等を持ってないのかもしれない。

「カイ？」

扉が開いた先の居間に、カイの姿は無かった。

部屋の広さや右奥のコンロ等はレイの部屋と変わらないが、レイがカーペットを敷いてテーブルだったのに対して、ここは畳にちゃぶ台だった。

床一面に敷いてある畳に足を踏み入れて、部屋を見回す。寝室などに続く廊下への扉も、レイの部屋と同じ位置にあった。

テレビと、冬の名残のような石油ストーブ。それ以外には目立つたものが無い、殺風景で地味な部屋だった。

・・・まあ、カイらしいといえばカイらしいんだろうが。

逆に派手だったりしたら絶対引くだろうし。

「おい？カイ？」

「おう。来たか」

廊下に行く扉が開いて、風呂上りだと一発でわかるカイが入ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい・・・・・・・・」

「なんだ？」

カイは腰にタオルを巻き肩にもう一枚引っ掛けただけの格好で、冷蔵庫から缶ビールを一本取った。

「客がいるのにその格好はねえだろ」

「なんだお前。自分が客みたいないな贅沢な扱いされと思ってんのか？」

「やっぱり俺の扱いって最悪なのか・・・・・・・・？」

「昨日忙しすぎてな。寝たは寝たんだが、風呂には入れなかったんだよ」

カイはその格好のままコンロに背を預けると、ビールのプルタブ

を開けて一口飲んだ。

「まあとりあえず座れ。折々話してやるから」

そう言われて、俺はとりあえずちゃぶ台の横に座った。

「お前はこれから、俺たちのボスに会う。まあこれはただの挨拶だな。それが済んだらタトウを彫る。今のうちどんなタトウを彫るか考えとけよ」

どんなタトウと言われても、今まで俺はタトウなんて見たことが無かった。

昨日今日でカイやレイやハクユのタトウを見た限りだ。

「………今まで、構成員はどんなタトウを彫ってた？」

「あ？例がほしいのか？………そうだな。カズは背中いつぱいに死神のタトウしてるが」

「………死神？」

「……ん？ああ、そうだが」

危うく爆笑しそうになった。

第一印象とどこまで一致してんだあいつ。

「あとはそうだな……ラクトは指にバラ彫ってる。それが一番小さいタトウかな」

バラ？指に彫ってあったのか。あの時は気付かなかった。

「そんなもんだ。タトウ彫ったらあとは部屋に案内してやる。したら俺の仕事は終わりだ。部屋の整理はてめえでやれ。食料はそろえてあるから」

部屋の形は恐らくみんな一緒なのだろう。だが俺の部屋は洋風と和風のどっちだろう。もしかしてはじめは何も無いとかそんなんじゃないだろうな、と不安になる。

カイはビールを全て飲み干すと、今度はまた煙草を取り出して火を点けた。

「ちよつと待つてろ。着替えてくる」

そして奥の扉に消えていった。

一人残された俺は、なんかずいぶんと久しぶりにため息をついた。

ボスに会う……か。
どんなやつだろう。

全身傷だらけでサングラスとかかけて葉巻なんて銜えてて、「裏」世界の帝王みたいな感じなんだろうか。

いやまさかそこまで定番じゃないだろう。
じゃどんな感じだ？

もんもんというんな「ボス」を考えていると、そのうちカイが戻ってきた。適当な服に白衣を引っ掛けてきた感がある。
紐に結んだ携帯灰皿も、ちゃんと首から下げている。

「じゃ、行くか」

カイはさっさと部屋を出て行って、俺はあわててその後を追った。

カイは地下二階に降りた。

ボスって俺たちと同じところに住んでんだ。

少し意外だった。

こう、もっと違うところというかみんなが使っているわけじゃない一階とかに住んでるのかと思ってた。

大体降りたエレベーターの反対側に来たところで、カイは一つの扉の前で立ち止まった。

ここか？

だが俺はその扉が開いたとき、既視感を感じるようになった。

そこはさっき降りてきたのと変わらない、白いエレベーターだった。

「ボスの部屋に行くエレベーターだ」

びっくりしている俺に気付いたのか、カイは短く説明してくれた。
「ここが行くのは地下三階。この下にあるのはボス楚月とその秘書リカの部屋だ」

カイが言った通り、このエレベーターのボタンは「B2」と「B3」しかなかった。

そしてエレベーターは、地下三階に着く。

扉が開いた先にあったのは、まずは厳重なゲートだった。

カイはゲートのキーボードとしばらく格闘し、その後ゲートが開いた。

「ちょっと待つてろ」

そのゲートをカイは一人でくぐり、そして今度は向こう側のキーボードをカタカタやり始めた。

そしてしばらくするとゲートがピーと鳴いて、「もういいぞ」とカイが手招きした。

俺が通るとなんかあんのかな・・・と思いつつ通ると、ゲートはうんともすんとも言わず、俺は無事にゲートを抜けることができた。

多分さっきのカイの格闘のおかげだろう。

「何やってたんだ？」

さつさと歩き出したカイの後を追ってそう尋ねてみた。

「お前はまだオロドジウム持ってないだろうが」

あ。

そついやそうだった。

とするとあれはオロドジウムを持ってない俺を特別に通すためだったのか。

「ホントにお前は面倒だよな」

「あ？」

不意に言われた愚痴に、思わず不良相手の口調になってしまった。「お前の手配のせいで昨日はまともに寝れなかったし、ゲート通るのにも一苦労だ。・・・それにしても何で俺が・・・」
ぶつぶつと愚痴ってるカイと俺はやがて、一つの扉にたどり着いた。

それは今までの白いものと全く違う、黒一色の扉だった。

だが形は全く同じだ。形は同じでも色が正反対だと奇妙な感じがした。そしてどこか不気味な感じもした。

カイはまたパスワードを入れて、今までのそれには無かったチャ

イムのようなものを押した。インターホンみたいだ。

「カイだ。ゼンをつれてきた」

「わかりました。今開けます」

カイが声をかけると、すぐに知らない女の声が返ってきた。

インターホンみたいだ、という俺の予想は当たっていたわけだ。

直後黒い扉が自動的に開き、俺はまた無意識に警戒してしまった。
なんか癖になりそうだ。

「ようこそ、我がマフィアへ」

その先に立っていたのは、賢そうで物静かそうで黒髪を肩ほどまで伸ばした眼鏡の女性だった。キャリアウーマンのような黒スーツに身を包んでいて、その女性のイメージとは少し外れて若干胸元がはだけていた。谷間が見えるぎりぎりだった。

そして、目。

深緑とオレンジ色の目が、まっすぐに俺を見ていた。

「私たちの新しい仲間、・・・・・・ゼン」

女性はすっと笑い、俺に手を差し出してきた。

女性の手を握ると、その手は水にでも触れたように冷たかった。

「私はボス楚月の秘書、リカです。A F O W へ、ようこそ」

女性——リカはまた、すっと笑った。

黒い扉の向こうは、上の階と全く変わらない白い部屋だった。形も同じだ。

「私の部屋です」

へえ。リカは戦闘系では無さそうに見えるのに、変わらず遊び場があった。

リカはまたしてもパスワード付の厳重な金庫から鍵を一つ取り出して、他の部屋には無い、またしてもパスワード付の扉を開けた。

「・・・・・・・・・・なんでパスワードに鍵なんだよ・・・・・・・・・・」

「パスワードは鍵穴を空けるための鍵なんだよ」

俺の小さなつぶやきを目ざとく聞きつけて、カイもポツリとつぶやいた。

二重ロツクの扉の先には、エレベーターが一つあった。

「・・・・・・・・・・また降りるのかよ・・・・・・・・・・」

「対襲撃者用に作ってあるからな」

最初のオロドジウムを感知するゲートで十分だろ。と思っただ、これが「裏」世界じゃ常識なんだろう。

相手は「表」世界では想像もできないくらい、強大で恐ろしいのかもしれない。

リカとカイと俺はエレベーターに乗り、「B4」へ向かう。

「・・・・・・・・ボスってどんな奴なんだ？」

エレベーターの中の沈黙に耐えられなくなって、思わず言ってみた。

どうしてだろう。カイもリカも、どこかしゃべり難い雰囲気をもっているように思える。

「女ったらしです」

「あ!？」

意外にも真っ先に口を出したのはリカだった。口調にどこかいらだちのようなものを感じるのは、気のせいだろうか。

「何人も女と寝て、その度にその女の目を使って眼球手術をするんです。そうやってボスは、最強の『力』を手に入れました」

一瞬、耳を疑った。

「さ・・・・・・・・最・・・・・・・・強・・・・・・・・!？」

「何を驚いているんですか？ここは私たち能力者を集めたマフィアAFOW。そのボスが、最強でないなんてそんなことあると思っっているんですか？」

リカにそんなつもりは無いのだろうが、どこか馬鹿にしたように聞こえた言葉にむっとする。

だが怒っても仕方が無いので何も言わなかった。

馬鹿にする気は無かったのだろうし。

「だからあなたは、ボスに次ぐ二人目の最強。このマフィアにとって、あなたを獲得できたことはこの上ない功績なんです」

獲得……!?

今度は怒る以前に半ば呆れた。

人のことなんだと思ってたんだ。

そしてエレベーターは、地下四階に着いた。

エレベーターの扉の向こうは、例のゲート付の、嚴重な黒い扉だった。

「こりやまた重装備だなおい……」

「何を言ってるんですか。一マフィアのボスたる者、このくらいは当然です」

さも当たり前のように言うリカに呆れつつ、オロドジウムを持たない俺を特別に通す、ゲートとの格闘が終わるのを待つ。

今度はカイじゃなくリカがやったせいか、待ち時間がやたら短かった。

そうして俺は無事ゲートを抜け、カイがパスワードを入れた黒い扉の前に立つ。

「開くぞ」

その声と同時に、黒い扉が開いた。

つまりそれは、俺とボス楚月を隔てる壁の消失だった。

「というわけでゼン」
ん?

「幸運を祈る」

俺が振り返ると同時にカイの足がげしと俺の腰に入り、俺は開いた扉の向こうに蹴り飛ばされた。

「俺ボス苦手なんだよ」

「因みに私も」

閉じていく扉の向こうで、カイとリカが二人して呑気に手を振っている。

「……………おっ……………」

今から扉に飛び掛っても、その前に扉は閉じてしまう。
だから俺は大声で叫んだ。

「覚えてろよおおおおおおお!!!」

俺の咆哮は届いたかどうか。

扉はぴしゃんと閉じ俺は一人残された。

やっぱり、俺扱い最悪だ。

蹴られた反動でまだ完治してないわき腹の傷がまた痛み出していた。

絶対殴ろう。顔合わせた一瞬後に殴ろう。

そう固く決心して、傷を庇いつつ立ち上がる。

暗い部屋だ。照明がおぼろげな光を放っているだけで、部屋の隅などは闇がうずくまっている。

そして壁も床も、黒い。

それが部屋の暗さをよりいっそう際立てていた。

レイの遊び場の二倍近く広くて黒いが、それでもここには何も無い。

ここはきつと遊び場なのだろう。

「・・・・・・・・・・ボス・楚月・・・・・・・・・・」

そして誰もいない。

俺はなんとなく、そう口に出していた。

俺はボスに会わなければならぬのに、どうしてボスがいないのだろう。

「・・・・・・・・・・いないのか・・・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・・・ああ。君が噂の新人か」

声は背後から届いていた。

俺は息を呑んだ。体に緊張が走り産毛が逆立つ感じがした。

唐突に背後を取られるなんて、そんなことあるのか?

俺はゆっくりと振り返った。誰もいなかったはずなのに、声が聞こえた背後に。

「・・・・・・・・・・櫻井粹然。最強の力を持つ、新しい俺たちの仲間」

一人の男が立っていた。

歳は、三十を越えたかどうか。短くさらさらした黒髪に、すらりとした長身。右頬には、蔓がのた打ち回っているようなタトゥーがあった。

でも、そんな外見なんかどうでもいい。

この男が、ここにいるべき人物であること。この男が何者であるかということ。

それら全てを証明し、怪しい光を抱いている、双眸。

それは俺と同じ、白と黒の色彩だった。

それは俺と同じ最強の「力」を持つ、ボス・楚月の証明だった。

「楚月………」

「ああ。俺の名だ」

男——楚月は、ふっと表情を緩めた。

笑った——。

失礼なことにそんなことを思った。

「櫻井粹然。新しい、君の名は？」

一瞬、何を言ってるんだ?と思った。

名前ならさつき、自分で言っただろう。

だが「新しい」という言葉で、ああ、と納得した。

「……ゼン、ゼンだ。俺の新しい名は、ゼン………」

「そうか、ゼン。俺たちは、君を歓迎する」

楚月はリカと同じように手を差し出してきた。

白く細くそれでも力強い手だった。握るとそれが強く感じられた。

「ゼン。君の能力は？」

「……あ………」

言われて、初めて気がついた。

俺の、能力。

最強だと、はやしたてられていたというのに、俺はその最強に力がなんなのか、疑問に思うことさえなかった。

なんか、とんでもない恥に思えた。

「・・・・・・・・まだ覚醒していないのか」

手を離して、なぜか楚月はその手を黒い壁に当てた。

「覚醒していないなら再生能力も多少鈍るが・・・・・・・・まあ、手加減はしてやろう」

楚月の体に、影がかかった。

初めはそう見えた。体に闇がまとわりついた、そんな感じ。だがそれは全くの勘違いだった。

楚月がとん、と床を蹴って壁の影に飛び込むまで、俺はそれに気付けなかった。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・!!?」

消えた!?

俺の頭は瞬時に理解できなかった。

とんでもない混乱で頭がいっぱいになる。

ただ黒い部屋を包む殺気だけは、ちゃんと理解してくれた。

弱いとはいえ殺気なら常日頃向けられているから、感じなれていた。

絡んでくる不良たちに感謝する日が来るなんて、夢にも思わなかった。

「・・・・・・・・くそ・・・・・・・・っ!つんとに殺す気かよ・・・・・・・・!!」

本物の殺気に汗が噴出し、情けないことに足がすくみそうになる。でも手はなんとか腰のナイフに伸びてくれた。それに触れて、少しだけ思考する余裕が戻る。

「力・・・・・・・・か!?

混乱する意識の中で、何とかそれだけ理解する。

人一人が唐突に消えるなんて、つい先日知った「力」でもなきや有り得ない。

いきなり消えたってことは、どこからいきなり現れてもおかしくない。そうなれば何をされるかわかったもんじゃない。

「汗をかいてるな」

ひた、と頬に硬く冷たいものが当たった。

それは鉄の冷たさ。それも鋭く強く研ぎ澄まされた、凶器としての冷たさ。

「……………っうあ……………!!!!」

レイとは比べ物にもならない殺気に、わけもわからないまま冷たさから逃げた。

その時軽く背を押された感触があつて、それだけで俺はバランスを崩した。

楚月……………!!!!

俺は倒れる過程で、その姿を見た。

俺と同じ黒と銀の双眸をらんと光らせ、その手に収めた巨大な槍を俺に向け、黒い闇をまとっている。

感じるのは強い、純質な殺気。

全てが一瞬だった。

楚月の槍が俺の左肩をかすめシャツを壁に縫い付けて、俺の体を壁に叩き付ける。

背に受けた衝撃に肺でもやられたのか、俺ののどからはヒューヒューとおかしな音がもれた。

頬を一筋の汗が伝った。

今思えばとんでもなく強い一撃だったのではないか。

槍の矛先は俺のシャツを貫いただけなのに、俺の体を跳ね回ることの痛みはなんだ!?

悟った楚月の本気に、全身が震えた。

カチンと音がした。それが最初、俺は何の音だかわからなかった。どこか遠くで聞こえたようなそれは、それでも近くで鳴ったものだということは何とか悟った。

カチカチカチと今度は連続して鳴る。

その時になつて俺は何とか理解した。

それは俺の歯が震えて鳴っている音だった。

信じられなかった。いやそれよりも、理解できなかったという方が正しいかもしれない。

自分のとんでもなく情けない姿を晒していることに、理解が届いてくることはなかった。

歯を鳴らし体を震わせて、まるで獅子に追い詰められ恐怖に怯えている兎のような自分の姿を、まるで他人事のように感じていた。打ちのめされるっていうのはこんなことを言うのだろう。

情けない。

この世界でも生きていけるという自信が、木っ端微塵に砕かれた。なんて、情けない。

誰にも屈さなくて誰にも従わなくてただ一人孤独を愛して、そうやってずっと美化し続けてきた自分が、今たった一人の人間に負けて打ちのめされて泣きそうになっている。

本当に、なんて情けないんだろう。

今こうやって情けないと思っている自分さえも、情けなくくだらなくてどうしようもなく滑稽だった。

「泣いているのか？」

誰が泣くか、この野郎。

せめて、せめて泣かないでいることだけが、俺の自信を保つ手段だった。

「泣いていないのなら、上出来だ」

ずっ……と槍が抜ける。つまり俺は自由になったわけだが、唐突に殺気が消えた反動か体がまともに動かなかった。

全く、情けない。

「いきなり襲つて悪かったな。やはり君はいい人材だ」

立っていない俺に、楚月は手を差し出してきた。手を貸そうというのか。

……………。

俺は震えそうになつて足を叱咤して、楚月の手を借りずに一人で立ち上がった。

理由はなんかむかついたからに決まってる。

楚月は大して気にしていないようにふつと笑い、手を引いた。

「ゼン。これからの活躍を期待してるぞ」

全然そんなこと思ってたなさそうな顔で、楚月はそう言った。
でも、期待しているのか……と頭の隅で思った。

「無事だったか。ゼン」

「どの口がそれを言うかこのくそ野郎」

楚月にこてんぱんにやられたあと。楚月はさっさと闇に紛れて消えてしまつて、俺はいつまでもそこに突っ立てるわけにもいかず黒い部屋を出た。今冷静になつて考えてみると楚月の「力」は闇を操るというか闇に紛れることなのだろう。当たつてなくても全く違うということはないはずだ。

外に出るとそこには煙草をふかしたカイが待っていた。帰つたのか、リ力はいなくなっていた。

「でも怪我してんな。やつぱりボスに襲われたか」

カイは俺の左肩を見て言った。楚月の槍にやられた傷だ。シャツが派手に裂かれてはいるが、大して痛くないかすり傷だ。

ふとカイが、俺の左肩を凝視していることに気づく。何故か驚愕の色がそこにある。

「カイ？」

「……ん？ああ」

声をかけるとその表情は嘘だったかのように名残もなく消え失せた。こつちが見間違いだったかと疑うぐらいに。

「その程度の傷なら手当することもねえな。行くぞ。次はタトウーだ」

カイはさっさと背を向けて歩き出し、俺は問い質すタイミングを逃がした。なんだったんだ。結局。

俺はカイのあとを追つて歩き出し、ボス・楚月の部屋をあとにした。

「タトウーって、どこで彫るんだ？」

計三回エレベーターに乗って、俺とカイはやつと地下一階に着いた。

「ここだ」

「ここ？」

「オロドジウムを墨に混ぜて彫るんだぞ。外で彫ってどうする」

ああ。そう言えばそうか。

「じゃあ彫り師は？」

「もう呼んである」

やっぱり、組織の秘密をばらしてる彫り師がいるのか。

そんなことを考えているとすぐに、前を歩いていたカイが立ち止まった。

「ここだ」

それだけ言ったカイが扉の前に立つと、扉は自動的に開いた。個人の部屋と違ってパスワード式のロックはないらしい。

「いらつしやい」

ふと開いた扉の向こうから、女の声が聞こえた。

この声……どこかで……

「ゼンを連れてきた。後は頼んだぞ」

俺も部屋の中に入って、カイがそう話しかけ、はいと返事した相手を見た。

「ハ……」

そこにいるのは彫り師だとばかり思っていた俺は、意外な人物に声を上げた。

「ハクユー!!？」

「……こんにちは、ゼン」

寝台の横に座ったハクユは、驚き声を上げる俺を見て口元に笑みを浮かべた。

「ま……まさか彫り師って……」

「この状況からすればハクユに決まってんだろっが」

「何で言わねえんだよ!？」

「面倒臭えからに決まってるだろ阿呆」

「・・・・・・・・・・」

「じゃあ、ハクユ。頼んだぞ」

「はい」

絶句する俺を横に、カイはハクユに俺を任せてさっさと部屋を出て行った。

じゃあ、始めますか。と言われて、俺はハクユに向き直る。

「タトウー、・・・・何にするか決めた？」

レイの部屋で会ったときと同じ、控えめな印象。

タトウーを彫るのに使う針などの道具を傍らに並べて、小柄なせいでいすにちょこんと座っている感じ。

なんか彫り師には見えなかった。女だし、熟練したイメージもないし。

「・・・・・・・・・・狼」

でも俺は、ポツリと伝えた。

「狼？」

「銀色で、抽象的に。・・・・強く見えるように」

ずっと、漠然とだけ考えていた。輝く銀色の体で一人孤独に生きる銀狼の姿を。真っ白な満月を背景にして、誰よりも気高く何よりも孤高に、咆哮をあげる銀狼。

それはなんというか、俺の根深いところに強いイメージとして残っている。なぜなのかわからない。ただ自分を美化し続けてきた俺は、自分は銀狼だと思っていた。孤独を愛し群れから逃れ一人ぼっちで気高く生きる孤高の銀狼。髪も青銀色だし、ちょうどいい。

だからこの体に一生刻むとしたら、そんな銀狼の姿がよかった。

「銀色の狼・・・・・・・・・・か」

ハクユはそれだけつぶやくと、なにやらスケッチブックのようなものを取り出してページのひとつにさらさら鉛筆を走らせた。待っていた時間はほとんど言っていない程無く、ほんの十秒と少しで鉛筆を止めてそのページを俺に見せた。

そこには俺がイメージした通りの銀狼がいた。

いかにも十秒で書いたような線が重なり、こちらを凜とした目で見つめる銀狼を形作っている。何本かの線で書かれた体毛は風になびいたように曲線を描き、その後ろには俺の心を読んだかのような満月がひとつ浮かんでいた。

「こんな感じになるけど。もっとこうして欲しいってところがあれば言つて」

「……いや……」

ホントに心の中を読まれたみたいだ。そんな風に思っくらい、俺の心の中のイメージを完璧に写し取った絵だった。

文句のつけようがない。

「……完璧だ。これでいい」

「そう？じゃあ清書するから、もう少し待つて」

ハクユはまた絵を自分のほうに向けて鉛筆を走らせ始めた。今度はペンも使っていた。待つといっても思ったよりずっと早い時間で、ハクユは清書を終わらせた。一分も経ってないだろう。

ハクユはさつきより具体的になった銀狼を見せてくれた。

力強い一本の線で描かれてさつきよりもずっと存在感を放つ銀狼が、俺をにらみつける。

その絵には魔力でもあるような感じだった。その銀狼が紙の上で生きているように見えて、俺はその鋭い視線に魅了されて目を離すこともできなくなった。

「これをそのまま肌彫ることになるけど、いいかな？」

「いい。これ、気に入った」

そう言つてスケッチブックに上の銀狼をなぞると、ハクユは控えめに、それでも嬉しそうに笑った。少しだけど、可愛いなあと思う。「それじゃあ早速彫ろうか。絵柄が早く決まってよかったよ」

どこに彫る？と言われて、それは全く考えてなかったことに気づく。でも少し考えて俺は「ここだ」とシャツの上から心臓を指した。銀狼を俺に重ねるなら、もってこいの場所だ。我ながら名案だと思

う。

「わかった。シャツ脱いで、その寝台に仰向けに寝て。一時間ぐらいでできるから」

ハクユは俺がシャツを脱ぐのを手伝い、そのシャツを脇の台に置いて置いた。そして気合を入れるためか服の袖をまくってピンで留め、長い前髪もピンで留める。ずらりと並ぶ道具の中から一本の針を取り、上半身裸の俺が仰向けになっている寝台の横に立った。

「始めるよ」

その声と共に、俺はそつと目を閉じた。

心臓の上に身を刻まれる痛みを感じながら俺は、嗚呼、もう戻れないんだなと思った。

戻れないことはもう、ここに入った時点で変わらない。でもオロドジウムを混ぜた墨でタトウを彫ることは、この組織の一員である証を刻むことは、また一步「表」の世界から遠ざかることだ。

それはとても怖いことだ。でも、戻れはしない。

ならば腹を括ろう。覚悟を決めよう。このタトウと共に刻むのは恐怖ではなく覚悟にしよう。

どんなことがあっても俺は、この世界を生き抜いていこう。

もう、決めた。

情けないけれども、恐怖はいつだって付きまってくる。だから、決めた。

戻れないのなら、怖くても進もう。

ただ胸を張って、さも強く気高く見えるように、進んでいよう。

俺という存在に、誇りを持って。

そんなことを考えながら、俺はいつの間にか眠りの世界に沈んでいた。

ほんの少しだけ、俺に似た銀狼の姿が脳裏を掠めた。

「……………ゼン。ゼン！起きて！ゼン！」

肩を揺すられる感覚に目を覚ました。薄く目を開けると、その狭

い視界にはハクユがいた。

「終わったよ。鏡で見てごらん」

そう言われるのとはほぼ同時に、意識が完璧に覚醒した。体を起こし左胸を見てみた。上からじゃちゃんとした形は見えない。でもそれは確かにあの銀狼だった。紙の上から俺を睨みつけ、俺を魅了した銀狼。

銀狼がいるところがひりひりと痛んだ。たいした痛みではないが、なんというか同時にかゆみも覚えてどこか不快な痛みだった。

俺は寝台から降りて、ハクユが押してきた鏡の前に立った。

銀狼がいた。俺の肌の上に胸の中に、ちゃんとした。

ハクユが見せてくれたスケッチブックのそれと全く同じ、満月を従え風にたてがみをなびかせた孤高の銀狼。それはやはり存在感と威圧感を放ち、俺の肌の上で生きているように見え、俺を睨みつけそして強く魅了する。

俺は彫り師としてのハクユの腕を認めざるを得なかった。

「気に入ってくれたかな？」

ハクユは俺のシャツを片手にそっと近づいてきた。ハクユはもう、前髪のピンもまくった袖を留めるピンも外していた。

「ああ。すごく気に入った。ハクユは天才だな」

ハクユはそれにくすりと笑い「ありがとう」と言っただけだった。玄人の余裕が大して喜ぶような態度を見せず、ハクユは俺にシャツを渡してすぐに道具の片付けに向かってしまった。

天才とか、上手いとか、言われ慣れてんのかな。

そう思いつつシャツを着ようとした俺は、それに気づき思わず目を見開いた。

シャツに、大量の血が染み付いていた。白いシャツに血の紅はよく目立つ。しかも半端な量じゃない。鋭利な刃物で斬られたような出血量だった。これだけの血に、どうして気づかなかったのだろう。染み付いてるのは、左肩だった。その生地が派手に裂けて、そこを中心に背や胸へと血が広がっている。

これは……………。

楚月に、やられた傷だ。大して痛くなくてかすり傷だと思ってたから、全く気にしないで見もしなかった。

思わず左肩に触れる。触れた手に血なんてつかない。肩に痛みなんてない。傷なんて、どこにもない。

じゃあこの血は何だ？

他人の血だとは思えない。これは明らかに楚月にやられた傷から出血した俺の血だ。だがこの血の量なら全治二週間はかかる傷だったはずだ。それがどうして、今きれいさっぱり治り、消えているんだ。

ふと、さっきカイが俺の肩を見て驚愕していたのはこれのせいだったのかと思いつく。だったらなぜ治療しようとしなかった？医療班の癖に。

もしくはもう傷が治っているということに気づいていた？

それにハクユだって、シャツを脱がせるときに気づいていたはずなのに何も言わなかった。

二人とも、なんで何も言わないんだ？

俺ははまだ片付けを続けるハクユに振り返った。聞いてみた方がいいだろう。一人で考えていたって答えは出ない。

「ハクユ……………」

「何？」

ハクユは片付けを中断して振り向く。琥珀色の髪が揺れて人魚の鱗のようなタトゥーが見え隠れする。このタトゥーほどハクユに似合うものはないかと、ほんの少しだけ思った。

「この血、気づいてたんだろ？」

血まみれのシャツを見せる。

「何で言わなかったんだ？こんだけの血なら大怪我してるって思うじゃねえか」

ふっと、ハクユの口元から笑みが消えた。まずいこと聞いたかな、と少し後悔する。

「ゼンは最強だから」

「え？」

意外な言葉に思わず聞き返してしまう。

「何も聞いてないのね。でも最強だからしょうがないのか」

ハクユは、寝台に腰掛けて俺を見上げた。

「誰も話してくれないだろうから、私が話してあげるね。とは言ってもほんの少しだけ」

どうして、最強の話は誰も話してくれないのだろう。「最強」だから？もしくはみんなカイみたいに面倒くさがるから？

「ゼンの眼は黒と白の現在確認されている中で『最強』と称されている無敵の眼。でもどうしてそれが最強と呼ばれるかわかる？」

「力が……強いからじゃないのか？」

「うん。それもあるよ。でも人によってみんな能力が違うのに、どっちが強いかなんて容易には決められない。力が強いことのほかに、『最強』にはみんなとは決定的に違う点があるの」

決定的に違う点？思わず体を見下ろす。違うところなんてどこにもない、生まれたときからずっと他人と同じ健康な体だ。

ハクユはそんな俺を見て、クス、と笑った。

「体が違うわけじゃないのよ？それは外見に出るわけじゃない。『最強』は無限の再生能力を持つ。『最強』はどんな傷を負っても常人とは比べ物にならない再生能力で治癒してしまう。ゼンの肩の傷も、その力ですぐ治っちゃったんだよ」

その言葉は、衝撃だった。

再生能力という、漫画や小説でしか見たことがないような力。それが俺の中にある。

信じられない。こんなの本当に、人間じゃない。怪我をしてもすぐに治ってしまうなんて、そんなの人に見られたりもすれば間違いなく化け物扱いされるだろうに。

「……でも、待てよ俺、まだ力が覚醒してない」

「力が覚醒してなくても、再生能力は生まれたときからゼンの中に

ある。力を知ることで一氣にそれが覚醒したんだと思う。知る、つていうことは人が思っているよりすごい力を持つてるものだよ。ゼンは人より治りが早いって言われたことなかった？」

そういうことを言われた覚えはない。でも俺はよく人に絡まれてほとんど毎日怪我させられていたから、面倒くさくて親にも言わないで手当てもまともにしなくてよく放っておいたつけ。そういう傷は、やたら治りが早かった気がする。よほどの怪我じゃなければ、次の日には治っていた。

でもそれは、こんなに強い再生能力ではなかった。誰にも見せなくて誰にも気づかれなかったけれど、自分でその治癒の早さを気味悪く思うほどじゃなかった。

それなのにどうして、どうしてこんな唐突にこんなことに気付かされるのだろう。ただでさえ「力」の存在もまだ納得し切れてないのに。

「はい。お話はこれで終わり。私が教えられるのはこのくらいしかない」

困惑する俺を余所に、ハクユは寝台から腰を上げて「さて」と引っぱり出した箱から何かを取り出した。

「タトウーっていうのは案外手間がかかるんだから。あと二週間はかゆくてもかいちゃ駄目よ」

ハクユは俺を寝台に座らせると、彫ったばかりの銀狼の上にそれがきれいに隠れるぐらいでかいガーゼを当てて包帯を巻いた。

「でもゼンは全然痛がらなかったね。大抵の人は痛くてものも言えないぐらいなのに」

しかも寝ちやうし、と笑うハクユに「痛いなんて慣れてるからな」と返す。

ほんとに、慣れてしまった。ほぼ毎日殴り合い蹴り合いしてれば痛いなんて大したことじゃなくなる。

「はい、終わり。少し早く終わっちゃったね。カイさん呼ぶ？」

「……………ああ」

俺はそつと包帯の上から左胸に触れた。

俺の鼓動と一緒に、銀狼の鼓動も聞こえてきそうな気がした。

俺はベッドの上に倒れこんだ。

そのベッドはもちろん俺のもの。俺がいるのは俺の部屋。

ここが、AFOWに入った俺に与えられた部屋だった。

洋風とか和風とか心配していたことはなく、そこはただの真っ白な部屋だった。

コンロと流し台はある。その横に小さめの冷蔵庫もある。扉も同じ場所にある。ただ何もなかった。白い壁と床とが非現実的な雰囲気放っているだけだ。

寝室にはパイプベッドがひとつある。浴室もトイレもレイの部屋と全く同じだった。

広い遊び場も、ちゃんとあった。

ただそれだけだった。

「もうちょっとマシにならないのか」

カイに部屋に案内されて部屋を一通り見て、俺はどこもかしこもただ白い部屋に文句をつけた。

「家賃光熱費水道代その他払わせるぞ青少年」

ここは家賃光熱費水道代その他払わなくていい代わりに、家具その他日用品はないらしい。仕事……任務をこなして揃えろ？

「まあ何もないってことは自分の好きなように改造できるってことだ。おかげで俺もレイもカズも好きなようにしてるさ。明日にでも挨拶ついでにメンバーの部屋を回ってみろ。個性的で笑えるぞ」

そう言ってカイは去った。そして俺は新しい俺の部屋に一人残された。

そうして俺はとりあえず、ふかふかのベッドの上に倒れこむことにした。

倒れこんで、シャツの胸元のボタンを外す。俺のシャツは血まみれで着れたものじゃなかったたので、カイのシャツを借りた。血まみ

れのシャツはベッドの隅に放つてある。カイとは頭一つ分違うせいで、なかなかこのシャツはでかい。今は袖をまくつてあるが、これを伸ばすと指先しか見えなくなるのが何故か悔しい。

だがこれでもう、俺の居場所ができてしまったことになる。家の俺の部屋は、残っているのだろうに。

緋粹はどうしているだろう。お袋も。

二人とも、あの親父がいなくなったただけであれだけ悲しがつていたのに、今度は俺までいなくなってしまうてどうしているのだろう。緋粹もお袋も、きつと泣いたんだろう。警察に搜索願とかも出したんだろう。

俺がいなくなつて三日。二人とも心配してるのだろうに、連絡ひとつしてあげることもできない。

俺はカイに、ずっと気になつていたことを尋ねた。

家族に連絡することはできないのか。会いに行つてはいけないのか。せめて連絡だけは入れたかった。そうすればいろんなことを聞かれるだろうが、それに対してどう言い訳すればいいのかわからないが、それでも声が聞きたかった。

カイは首を振った。どんな人間にも、ここに秘密を漏らすわけにはいかない。とそう言つて。

せめて声だけでも。と追及することはなかった。一度首を振った今、カイがうなずいてくれるとは思えなかったし、連絡のひとつでもすれば居場所を聞かれるに決まつてゐる。もう二度と会えないと言つたところで、緋粹もお袋も納得してくれるわけがない。

憂鬱にため息をついた。信じられなかった。もう二度と家族に会えないと言われても、もしかしたらいつか会えるのではないかと思つてしまう。ここは本当は幻で、もう一度眠つて起きたらいつもの俺の部屋で、すべてが夢だったら。ただでさえここは現実味がないのに、そう考えてしまうのも仕方がないのかもしれない。

でも知つてゐる。わかつてゐる。何度も幻想であることを期待して、すぐにこれは現実であることを知る。その繰り返しなんだ。

これは現実なんだと、俺は知ってるんだ。

「・・・・・・腹減った・・・・・・」

心の中でいくら葛藤してても、腹は律儀に減ってるらしい。

そういえば何も食べてなかった。でも何もない。

俺はベッドから降りて寝室を出てリビングに入った。何もない真っ白な部屋の中、冷蔵庫がひとつコンロの横に置いてあるけれど何か入ってるんだろうか。でも整理したばかりの部屋の冷蔵庫に何か入っているとは思えなかった。ただでさえ整理したカイは適当な性格なのに。

半ばあきらめつつも冷蔵庫を開けると、予想に反してそこには一通りの食材が入っていた。肉に魚に野菜に果物、ポケットには一リットルのミネラルウォーターが二本に、五百ミリリットルパックの牛乳が一本。よく見ると納豆やヨーグルトも入ってる。それに何故か板チョコレートが二枚。

・・・・・・もしかして。

俺は流し台下の扉を開けた。一通りの調理器具がきちんと整理されて並んでいた。

ここは感謝すべきなんだろうが、何故か呆れた。なんか一通り過ぎる。

でも俺は腹の音に急かされて、とりあえず適当に切った野菜と肉をフライパンに突っ込んで炒めた。調味料はコンロ下に揃えてあった。適当に味付けして味見をする。少し薄味だったけど気にしないで火を止めた。濃い味の料理ばかり食べてると病気になるらしいし。そこで気付く。皿がない。食器棚がないからどこに置いてあるのかわからない。仕方がないので引き出しも扉も全部開いて探したが、結局見つかったのは引き出しに入っていた割り箸一本だった。

もしかして皿用意するの忘れたのか？これだけ食材用意しといえ皿だけ忘れたのか？

どうやらそうらしいという結論にたどり着いて、あのカイでも抜けたところがあるんだなあと感心した。完璧な人間なんていないの

だとわかりきったことをなんとなく悟った。

仕方なく俺はフライパンから直接野菜炒めを食べた。真っ白な部屋の中心に腰を下ろして夕食を食べるのも、奇妙な感じがした。早く日常品を揃えよう。そうしたらきつと今感じている非現実感も薄くなるだろう。そうしたらきつとここが幻想だと思うこともなくなるだろう。

物思いにふけっている間に、フライパンの中身を食べ終わっていた。

物を食ったら眠たくなってきた。洗い物は明日にしよう。そう思っ
て流し台にフライパンを放り込む。

眠って朝起きててもこの現実は何もないだろうけど、それでもどうにかなるだろう。

だってここが俺のいるべき場所。

だからきつと大丈夫だ。そう思いつつ左胸の銀狼のタトゥーを撫でた。

二週間は続くと言われたひりひりとした痛みは、もう名残もなく消え去っていた。

自らの居場所

A T 7 「外出」

俺は寝坊したらしい。

起きたらそこは相変わらず白い俺の寝室で、俺はその扉がノックされる音で目覚めた。そして何でノック・・・？と思ってる間にその扉が荒々しく開かれて。

「もう！いつまで寝てる気なのゼン！！」

すごい勢いで入ってきたのはレイだった。そう長くない髪を後ろで縛って、赤いＴシャツにサマージャケットを羽織っている。下は黒の短いスパッツ。

そして何故かその瞳は両方とも黒だった。カラーコンタクトだろうか。しかし何でそんなもんを？

「もう九時だよ！みんな待ってるんだからさっさと着替えて身支度して外に出る！！」

わけのわからないまま引つ張り起こされて寝室から追い出される。なぜ叩き起こされたのか、なぜレイがここにいいのか、いろいろ謎はあったがとりあえず寝ぼけ顔のまま女の前にいるわけにもいかなないので、浴室に行つてバスタブの蛇口から水を出して顔を洗い、寝癖を直した。そういえばタオルもなかったので仕方なく服の袖で顔を拭く。

そして浴室から出るとレイは仁王立ちで俺を待っていた。

「ほら！さっさと着替える！そのしわくちやのシャツで外に出るつもり！！？」

「そ・・・外・・・！？」

「そつだよ！いつまでも真つ白な部屋で暮らすつもり！？今日は一日買出しだよ！！」

レイに背を押されて、俺はとりあえず急かすレイに疑問をぶつける。

「ま、待てって！金は！？俺一円も持ってないぞ！？」

「カズさんがいくらでも貸してくれるでしょ！」

「カズが！？」

カイ、と言われれば何とか納得はしただろうが、カズと言われれば話は別だ。あの煙草ばかり吸ってる死神野郎が、人に金を貸すような神経を持ち合わせているようには思えない。

「カズさんは戦闘班のリーダーだから私たちの給料管理してんの！ちよつと借金して任務こなして返せばいいでしょ！！」

なんだそういうことか。ちよつとほつとした。だがすぐに次の問題に気付き、またレイに制止をかけた。

「待て！俺着替える服持ってない！」

これにはさすがに背を押すレイの力も止まった。

「・・・まあ、そうか。ゼン、いきなり拾われて来たからねえ」

それからレイは少し考えるような仕草を見せて、そして名案を思いついたらしく手をぽんと叩いて、何も言わず部屋を出て行った。

なんだったんだ？そう思う暇もなく、レイはあつという間に帰ってきた。

「ラクトが貸してくれるって。サイズもほとんど一緒だろうから」

「は？」

「は？じゃない！ほら、そうと決まったらさっさとラクトの部屋に行くよ！事態は一刻を争うんだから！！」

そんな切羽詰った状況には思えない。ただレイが何をしようとしているのか、俺に何をさせようとしているのか、よくわからなかった。いや、レイは俺に迅速な行動を求めているんだろうけど。

部屋から出るとそこにはハクユとラクトがいた。二人して「おはよー」と笑う。

そして二人ともレイと同じく、両目とも瞳が黒くなっていた。やっぱり、カラーコンタクトなんだろうか。

「今日はみんなで買出しに行くの。それにゼンもついていっている買うの。私たちも手伝ってあげるから。アーユアンダスタン？」

「・・・・・・わかった」

それを最初に言っただけ。

「よし。じゃ、ラクトの部屋に行こつか！」

レイは一人、元気だった。

ハクユとレイを廊下に残して、俺とラクトはラクトの部屋に入った。

ラクトの部屋はさっぱりとしたラクトらしくシンプルなものだった。テーブルに椅子だったレイの部屋に対し、ラクトの部屋は背の低いテーブルにソファだった。ただソファの上のダイヴしたるもふもふしそうなどでかあざらしクツションが異様に存在感を放っていて、俺が絶句して見ているとラクトは「応募したら当たっちゃったさー」と笑った。

ラクトは奥の扉を開けて寝室に向かう。それに俺はついていく。

「別に何でもいいよなー？」

寝室のタンスをひっくり返しながらかいてくるラクトに「ああ」と返す。

「じゃ、こんなんでいいか？」

しばらくして放られてきたのは白のＴシャツに白に青いチェックのジャケット。それに適当なジーンズ。文句言うつもりはないから礼を言っただけと着替えた。だいたいサイズは合っていて、不自由はない。

「なかなか似合っただけ。あ、あとこれも忘れちゃいけない」不意にパフ、と頭に帽子をかぶせられた。同時に視界もさえぎられて、俺はそれをかぶり直す。

「あー、でも髪長いから帽子じゃ隠せないのか。どーすっかなー」この帽子はやっぱり俺の目立ちすぎる髪を隠すためのものらしい。

外に出る以上、緋粹やクラスメイトに見つかるわけにはいかない。

「ゴムとピンないか？それで束ねるから」

「ん？ああ、それならハクユが持ってたんじゃないか？」

ちよつと待ってる、と言い残してラクトは寝室を出て行き、そして大して待たないうちに帰ってきたその手にはゴムとピンが握られていた。

「これでいいか？」

「ああ」

短い返事をして、おれは手早く髪を結びピンで留める。ラクトは女みてーと笑ったが気にせずうるせーと返して帽子をかぶった。

「あとこれな」

「あ？」

最後に差し出されたのは、暗い色のサングラス。これは意図がわからなかった。

「目。それもバレたらまずいだろ」

あ。そういうことか。

出かけるとき髪は大抵こんな風に束ねて帽子をかぶって隠すけど、目は髪に比べて大して目立たないから気にしたことはなかった。帽子を目深にかぶってしまえば隠れるし。

でも今は絶対にバレるわけにはいかない。俺は黙ってサングラスを受け取りジャケットの胸ポケットに突っ込んだ。

そういえばレイもハクユもラクトもカラーコンタクトをしているのはこういう訳だったのか。しかしラクトの灰色の髪も目立つと思うが、隠すつもりはないらしい。知人が東京にはいないのか、・・・

「よし。じゃ準備オツケーだな！」

だけどラクトは、につこりと笑って俺の背を叩いた。

ラクトは元気だった。

俺の金の管理はレイが受け持つことになった。

不満はなかった。カズから借りてきた二十万という大金を持ち歩く度胸もなかったし、家具家電を買うような大きな買い物はしたことがなかったから、レイにいる教えてもらういい機会だった。そして俺はレイとハクユとラクトと共に、初めて地上一階へ行くエレベーターに乗った。

そのエレベーターを降りたところは、倉庫のような物置のようなそれでも何もない部屋だった。目の前に扉がひとつあるだけで、本当に窓ひとつない。

レイたちが歩き出したのについていって、俺たちは扉の向こうに出た。

目を差した一筋の光に、思わず目を細めた。

それはずいぶんと懐かしく思える太陽の光だった。

そこは薄く日が注ぐ裏路地。だけどその曲がり角を出れば喧騒の真っ只中に入るようなそんな裏路地。そこに、レイとハクユとラクトとそして俺が立っていた。

思わず後ろを振り向いた。今いる場所があまりにも日常に近くて、またしても名残惜しく今までののは幻だったのではないかと思ってしまうからだ。

俺たちが出てきた扉は、確かにそこにあつた。その先には俺たちが上ってきたエレベーターがあつて、その下には白一色の壁に囲まれたA F O Wのアジトがあつて、その中に昨日もらった新しい故に何もない俺の部屋があるんだ。

「この扉、『力』の幻術で見えないようになってんだ」

扉に振り返った俺が、こんなところに何故扉があるのか疑問に持ったとも思ったのか、ラクトは不意にそう言った。

「だからここから誰かが出てきても、見えないしもちろん気付かない。見えたとしてもオロドジウムの感知センサーがあるから、開ける前にロックがかかるけどな」

ふーん。と俺はラクトの言葉にそれだけの感想を覚えた。どちらかというと幻術という言葉のほうに気になった。そんな「力」もある

るのか。

「・・・・・・・・あ！！やつと出てきた！！」

不意に右手から底なしに明るくそしてでかい声が降ってきた。びっくりしてそつちを見ると、目が覚めるような桜色の髪をした女が元気に手を振っていた。

女の横には二人の男がいる。一人は女と同じ年頃の黒髪の男で、俺と同じぐらいの年に見えた。こいつは女と同じようにこつちに手を振っている。

もう一人は二十歳を過ぎたあたりのやはり黒髪の男で、もう春だというのに冬用の黒いロングコートを着て壁に背を預け、こちらを見ようともしない。

「久しぶりね、ユオウ」

誰だ？と俺が思っている間に、レイはそう言いつつ桜色の髪の女の元へ小走りに駆け寄る。

え？

まさか・・・・・・・・仲間？

仲間だとは思わなかった。だって目は両目とも黒いし・・・・・・・・

あ、カラーコンタクトか。

「ちよつとゼンの準備に時間かつちゃって。ごめんね」

「うん。大丈夫。私たちもセトさん引つ張り出すのに苦労してさ。

出て来たのついさっきなんだ」

レイとユオウと呼ばれた女がそんな他愛もない話をしている間に、俺たちはみんなに歩み寄る。

「あ！この人がゼン？」

不意にユオウが俺の存在に気付き、にこーっと笑みを向けて手を差し出した。

「私ユオウ！同じ戦闘班のメンバーだよ。よろしくね」

「・・・・・・・・ああ。ゼンだ。よろしく」

少し無愛想な挨拶だと思ったけれど、それはユオウが元気なせいだと思うことにしてユオウの手を握る。

俺に比べて小さい手だ。年は同じぐらいだと思ったのに。

そういえば女と握手するなんてほとんど初めてだ。こんな機会があるとは思わなかったのに。

ユオウの桜色の前髪はピンで留めてあつて、そのむき出しになった額から見えるのは、おそらくオロドリウムが混じつた——AFOWの一員である証のタトウ。それはハクユのそれに似た水晶のような鱗のような模様が、花のような形をかたどつたタトウだった。「ゼン。ユオウのことは前にも話したよね。ほら、私の相方最長記録保持者だつて」

横から割り込んできたレイの言葉に、ああ、と急に腑に落ちたような感じがした。

ユオウつてどつかで聞いたことあるなあとは思っていたけれど、あの噂のユオウだったとは。

「あと、ゼン。こっちはキョウ。若いけど改良班の頭」
オルテイラー

レイに紹介された男——キョウというらしい——は「よろしく」と頭を下げた。

キョウのタトウは服の下の見えないところに彫つてあるのか、俺の目が届く場所にはなかった。俺も一応、少しだけ頭を下げた。「そしてこの人がセトさん。処理班の一員。^{デリター}セトさんには今日は一応の保護者としてついてきてもらうから。ほら、一応私たちみんな十代だし」

さつきユオウ、セトを引っ張り出してきたつて言つてなかったか？でもセトは嫌がつてるような仕草を見せないし、気にしないことにしよう。

不意に壁に寄りかかつて横顔しか見せなかったセトが、壁から背を離して体ごとこつちを見た。今まで見えなかった左目に眼帯をしている事に気付いた。

次に気付いたのはセトの異様さだった。

俺より少し背が高い。セトは俺を見ている。ちよつと見下ろしている。

その黒い右目に、おおそ生氣とか光とか言われるようなものが全く見当たらなかった。こういう目を、虚ろ………というのか？

それにセトは何も言わない。薄く赤い唇は引き結ばれたまま微動だにしない。しかも何だ？その動かない唇の端からだらりと垂れた白い………ひも？

そして次にとったセトの行動に気付かされたのは、セトのおかしさだった。

不意にだらりと下げられたセトの右手が動き、ゆっくりとロングコートのポケットにもぐりこむ。しばらくこそそこを何かを探るような動きをしたあと出されたセトの手には、ひき飴がつままれている。幽鬼のような白く細くそして長い指が白いひもをつかみ、そのひもに下がっているのは緑色の………つまりメロン味の飴。

それをセトは右目の前にひどくゆっくりとした動きで持っていた。

そしてその飴が視界に入った瞬間、セトの顔に浮かんだのは、笑顔、だった。

右目がそつと細まり、今までぴくりとも動かなかった唇が小さく笑みの形をかたどる。その目は、虚ろでは………ない。

そしてセトはその笑顔のまま、そのひき飴を俺に差し出した。

………は？

「セトさんなりの挨拶だよ。受け取ってあげな」

戸惑う俺に、レイは助け舟を出してくれた。

これが挨拶………？と思いながらもひき飴を受け取って、包装紙などに包まれているわけではないひき飴をポケットなどに突っ込むわけにもいかず、仕方なく俺はそれを口に放り込んだ。ひもまですの中に入れないから、俺もセトのように口の端からだらりとひもを垂らすわけになる。口の中に広がるのは、甘い、メロンの味。

それを見てセトの笑みが深まったように見えたのは………。気のせいだと思っておこう。

「一応言つとくけどね、セトさん、しゃべれないの」

「・・・・・・・・え？」

ぼそりとささやかれたレイの言葉に、思わず声を漏らした。

「しゃべれないんだかしゃべらないんだかよくわかんないんだけど、今のところ私たちの中でセトさんの声を聞いた人はいないの。それにどういうわけか動きもゆっくりしてて鈍いし、それに一時的にだけ時々目が見えなくなっちゃうこともある。けっこう頼りになる人なんだけどね、ちょっと体とか不自由な人なの。できればあんまり気にしないであげて」

「・・・・・・・・ああ」

身体障害者か。哀れむのはなんかいいとは思えないから、さつきみたいに奇妙な奴、とも思っていればいいんだろうか。それもなんだかな。

セトはハクユやラクトに俺と似た動きでひき飴をあげていた。二人とも嬉しそうにひき飴を口に含んでいて、その様子をやっぱりセトは笑みを深めて見ていた。

・・・・・・・・奇妙だけれど、いい奴なのかもしれない。

「よし！じゃ早速行こっか！」

ユオウは元気にそう言った。

いくら髪や目の色を隠していても、七人もの若者がぞろぞろと歩いていく姿はちよつと目立ったものだった。それにそのうちの二人は帽子とサングラスでなんか怪しい俺と、春なのに黒いロングコートでどこか怪しいセトだ。なかなか目立つ。

ということで目的別に二組に分かれることになった。食材調達目的のハクユとラクトとユオウとキョウの四人と、俺の家具家電調達目的の俺とレイとセトの三人。レイは俺の金持ってるいろいろ教えてもらうつもりだったからいいけど、・・・・・・・・セトはさっきからひき飴ばっか食って後ろをついてくるだけだ。役に立つのか。「おっきい買い物するんだから大人いたほうがいろいろいいのよ」

とレイは言うけど。「それにセトさんは頼りになるって言ったでしょ」

とりあえず俺とレイとそれにセトは、昨日なくて困った皿やテーブルやタオルを買おうと適当な百貨店に向かった。そこで買ったのは平皿と小皿と小鉢とお椀と箸を一つづつと、足が折り畳める白いテーブル、それとタオルとバスタオルを一枚づつ。とりあえずそこではそれだけを購入して、次は洗剤とかスポンジとかシャンプーだね、とレイと相談しながら店を出たとき。

不意に後ろを黙ってついてきていたセトが、足を止めた。すぐに俺たちもそれに気付いて立ち止まる。

「セト？」

振り返るとセトはひどくゆっくりと首を振る。それが何を意味しているのか、俺にはわからなかった。

「セトさん、また目が見えなくなっちゃったんですか？」

「・・・え？」

困惑する俺を余所にセトはまたゆっくりとうなずき、なぜかロングコートの前を開いてそこから白い杖を取り出した。それは携帯用らしく短く畳んであって、せとは長く伸ばしたそれで地を突く。そして杖で地を突きながら踵を返してふらふらとどこかに歩き出してしまった。

「あ、おい、ちょっと・・・」

目が見えないのに・・・と言いかけたところを、大丈夫だよとレイに制止される。

「セトさんは目が見えなくなっても多分大丈夫なの。耳がいいから人とぶつかることないし、こちら辺の地形完璧に覚えてるから建物とかにもぶつからない。まあセトさんの場合は向こうからよけてくれるから建物とかに気をつけていればいいんだけどね」

まあ確かに奇妙なセトの周りには誰もいない。よけるというかさける。セトなら目が見えてても見えてなくても気にしなさそうだけれど。

「それにセトさんけつこう小さい頃から目が見えなくなっちゃうときあつたらしいし、杖があるから大丈夫よ」

小さい頃からってことは目が見えないことにも慣れてるってことか。案外セトも苦勞してるのかもしれない。関節でも悪いのか動きは鈍いし、目は見えなくなるし、しゃべれないんだかしやべらないんだかわからないけど何も言わないし。目に生氣とか光とかが見えないのは、そういう生活を続けてきた結果なのか。

「じゃあ、次は家電でも買おっか」

セトの背中が人垣の向こうに消えて、レイは氣を取り直した風になつこりと笑つて言つた。

結局その後買つたのは炊飯器と小型テレビとカーペットと本棚だつた。

「今回はこのくらいにしとく？そろそろハクユたちも買い物終わつてるだろうし」

「………ああ」

「あ、でも服とか買つてないね。近くにあつたっけ」

「いい」

「え？」

「家に取りに行く」

最初からそのつもりだった。家に日用品ならいくらでも置いてあるんだ。金はできるだけ使いたくない。今なら緋粹は学校だしお袋も仕事だ。鍵はかかつてると思うが風呂場や台所なら窓から入れるだろう。

泥棒みたいなことをやろうとしてる自覚はあるけれど、氣にしないことにした。

「ああ、そつか。家、近くにあるの？」

「ああ。板橋だ」

ここは新宿だ。東京の中心と言つていいここに、A F O Wのアジトはあつた。

「そう。でも先にハクユたちと合流しちゃお。もうすぐお昼だし」
「……………ああ」

レイの後ろをついていって、俺は少し憂鬱にため息を落とした。

どうやら俺の知らぬ間に、レイはハクユたちと待ち合わせの場所を決めていたらしい。その証拠にレイは何の迷いもなく目的地にすたすたと歩いてゆく。

「なあ、待ち合わせ場所ってどこなんだ？」

「んー？えっとね、ゲームセンター」

何故にゲームセンター？と思ったが別に口にしろとは思わなかった。

「もうすぐ着くよ。あ、ほらあそこ」

そう言ってレイが指差したのは、なかなか大きなゲームセンター。そしてその入り口付近に、ハクユたち五人が集まっていた。途中で別れたセトもいる。

「、あ。やっときたよ」

一番最初に気付いたのはユオウだった。

「もー遅いよレイ！待ちくたびれた！」

「ああ、ごめん。ゼンの買い物が多くて」

レイとユオウはまた他愛のない話を始める。やっぱり仲がいいのだろうか。

その間に、俺はしゃがみこみガチャガチャに引っ付いて不審な人物になっているラクトを見つけた。

「……………なにやってんだ？」

ラクトは俺に気付かぬ様子で、真剣にガチャガチャの中身を見つめている。

よく見るとそのガチャガチャにあるのは「肉食帝国フィギア200円！」の文字。

「肉食帝国」？どっかで聞いたことあるな、と一瞬小首を傾げたがすぐラクトが毎週見ているというアニメのことだと思い当たった。

・・・そういうことか。・・・もはや何も言うまい。

「ゼン。買い物済んだの？」

不意にハクユが話しかけてきて、「ああ。まあな」と適当に返事を返す。

「じゃ早速お昼食べにいこつか。近くにおいしいラーメン屋さんあるんだ」

何故ラーメン？と思ったけれど、みんなそんな疑問は持たなかったようにむしろユオウなんかはやった！と歓声を上げる。

もしかしたらみんなでこうやって外出するときは、よく行く店なのかもしれない。もしくは有名でほんとおいしいラーメン屋さんだったり。俺はここの辺の地理に詳しくないからよくわからなかったけれど。

みんな意気揚々と移動を始め、俺もそれについてゆく。

こうしていると先日まで散々悩み考えていた「自分たちは普通の人間じゃない」という事実が馬鹿らしくなってきた。確かに自分には人間ではありえない力があつて、それを悟られてはいけないかもしれない。こうして外に出るときはカラーコンタクトなんて付けて目の色を隠さなきゃいけないかもしれない。

でもそれだけで何も気にせず外を歩けるし、仲間たちとどこへでも行けるし一緒に話をして笑いあったりもできる。

普通の人間と、何も変わらない。

「どうしたの？ゼン」

物思いにふけていたらいつの間にかみんなから遅れていたらしい。みんなが振り返って、俺を見ている。

みんなが。仲間が。

思えば、俺にはこんなにもたくさんの仲間ができていたんだ。表の世界に居た頃は・・・学校に通ってた頃は、仲間なんて一人もいなかった。みんなが俺を恐れ近づこうとしなかった。

だから俺は孤独を愛して毎日不良と喧嘩しまくって怪我してもふ

とした瞬間に悲しくなっても一人で強く生きていようと決めたんだ。
でも。

ここは違う。

ここでは俺は弱くて小さくて情けなく、とんでもない世界に振り
回されてるたった一つの存在だけど、それでも隣には仲間が居た。

表じゃ強く独りでいなければならなかったけれど、ここは弱くて
も独りじゃない。

「……いや、なんでもない」

案外こっちのほうが性に合ってるのかもしれないな。

だから俺は、新しい初めての仲間に笑みを向けて、精々かっこよ
く見えるように胸を張って歩み寄った。

激痛の再会（前書き）

グロ・流血表現があるので心の準備を。

激痛の再会

A T 7 「激痛」

俺は一人電車で揺られて自分の家に向かっていた。俺の家は板橋で、電車の乗り換えは一度するが大して遠いところではない。

レイたちは先に帰った。あまり仲間の自宅や本名を知るのは宜しくないことらしいのだ。俺はアジトへの帰り道を覚えているし俺を独りにしても何も問題はないので、昼食を食べ終わってから別行動ということになったのだ。

昼食といえば向かった先のラーメン屋は本当においしかった。ラーメンであれだけ美味を感じることができるとは知らなかった。それにしても値段もそれほど高いというわけではなかったし、なるほどあれなら近くに着たら食べに行きたいと思うのも道理だ。また行きたいな。

でも思考が家に帰ることに向くと気分は一気に暗くなる。今はお袋も緋粹も仕事と学校に行ってるから見つかる心配はないが、鍵がないから泥棒まがいのことをしなければならぬ。鍵は一応持ってたんだが、あのカズに拾われた運命の日、鍵を入れたバックがどっかに行ってしまったて行方知らずになっていた。大抵財布漁ろうとした不良にひっくり返されて、適当なゴミ箱にでも突っ込まれてるんだろう。

でも、それより何より家を見たらあの組織に帰りたなくなるんじゃないかと危惧しているからだ。

あそこには戻れないはずなのに、今現在俺はそこに帰ろうとしている。

そこに足を踏み入れたら、もう二度と出てくることができなくなりそう、少し怖い。

でもやつぱり家から盗んでくればいい衣服を買うのは気が引けるし、衣服のほかにも持ってきたいものがたくさんあるし、行かないわけにはいかない。

……こんな葛藤は、家に帰りたいと叫んでる本心を紛らわせてるだけのものかもしれないが。

そうこうしているうちに電車は板橋駅に着き、俺は電車を降りて駅を出た。急に見慣れた景色を目の当たりにして、心臓のあたりが苦しくなる。そういえばこの駅は通学に使ってたんだっけ。だからとても、見慣れてるんだ。そんな当たり前のことを強く実感した。ほんの三日ぐらいしか経ってないのに何気なく通っていた駅を懐かしく思ってしまう。

なんか老いた気分だった。浦島太郎ってこんな気分だったのかな。そんなことを思いつつ、目を閉じてても家に着く自信のある通学路を行く。家は、駅から五分の住宅街にある。

後ろ髪を引かれる思いで見慣れた道に行くが、足は正直なんだか天邪鬼なんだかわからないがいつも通り進み、大体五分後には家の前に立っていた。

ついに来てしまった。と思うけれどもう引き返すわけにも行かない。

周りには誰もいない。家にも人の気配はない。当然、お袋も緋粹もない。実は少しだけ、お袋か緋粹に会えるかもしれないと期待してしまっていた。会ったら会ったでどんなに事情を話しても引き止められるだろうから、ほんの少し姿を現して一方的に別れだけ告げてすぐ逃げようと思っていた。それだけのことだった。そのぐらいのことしか考えていなかった。でも会えないのは……別れさえ言えないのは……やつぱり悔しい。

ずっと家の前で家を見上げているとさすがに不審に思われるから、さっさと家の裏に回った。近所には知り合いも多い。ここでは気をつけないと。

台所。東向きで朝日を入れるための窓は広く、入りやすい。でも

残念ながら鍵が閉まっていた。よく開け閉めする窓だからもしかして開いてるんじゃないかと思ったんだけど……ああそうか。五日前ぐらいにこちら辺で空き巣が出て、それでその時緋粹は用心に越したことはないって家中の鍵閉めて回ったんだっけ。すっかり忘れてた。くそ。空き巣め。余計なことしやがって。

仕方なく次は風呂場に回った。ここは小さくて俺がやつと通れるぐらいの窓なんだけれど、この鍵は開いていた。うっかり者のお袋がその後開けて閉め忘れたんだろう。ナイスお袋。でもここを通るのは少し気が引ける。埃っぽいしやっぱり俺には少し狭い。他の入り口はないかと思つて探してみたけれど、運が悪く閉まってるっぽいそこから入るしかなかった。

腹を括ろつ。あの組織に入ったことに比べればこんなちっぽけな窓に入ることなど！！

窓を開けて枠に手をかける。ああ埃っぽい。窓は少し高いところにあるけど、足元のタンクを踏み台にして狭い窓に肩を入れる。意外にするりと入れてでも後は苦労して中に侵入した。

中は脱衣室で水の匂いがした。決していいとは言えない匂いだけれど、今では何よりもいい匂いだと思つてしまう。その匂いに縛られて、動けなくなってしまう。

駄目だ。ずっとここにいたら、帰れなくなる。

俺のいるべき場所は……帰る場所は、ここじゃない。

ここが俺の家なのに。

……止めだ。考えたって無駄だ。考えたって、このどうしようもない状況は変わらない。

俺は家族と会えないけど、もう仲間がいるんだ。

だから、大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせた。言い聞かせて無理やりにも納得していかなければ、思考の渦に潰されて動けなくなってしまう。

早くここを出よう。そう思つてさっさと脱衣所を出て二階に上がる。俺の部屋は、二階の一番奥の扉だ。

その扉を開けてずいぶん久しぶりに思える部屋に入る。汚い部屋だ。片付けもろくにできてなくて床にCDやら本やらが散らばっている。

感傷に浸ってしまう前に動く。気に入ってる旅行かばんと黒いバックを引つ張り出して、旅行かばんに片っ端からたんすの服を詰め込む。バックには散らばってるCDやら本やらを適当に突っ込み、その他日常品も放り込む。日常品は確認するだけで極力見ないようにした。あまり眺めていると、ここに残るという誘惑に負けて動けなくなりそうで怖かった。まるで追いたてられた草食動物みたいな必死さで次々とものを詰め込む。

途中でふと思出し、本棚の到底読みもしない分厚い本の間に隠していたへそくりも詰め込んだ。中身は二万円近い。金をためる習慣を持つててこんなに良かったと思っただけではない。さすが俺！

必要なものは全部持ったか部屋を見回して確認して、足早にでも静かに階段を下りる。リビングとかにも必要なものがあるかもしれないとリビングに足を向けかけて……止めた。

お袋や緋粹と過ごしていたリビングなんかに入ったら、本当に戻ってこれなくなりそうで怖かった。

名残惜しさを感じながら、振り返らないように苦労しながら、玄関に向かった。

……どうせ俺の私物しか盗んでないんだ。お袋たちならすぐに俺が来たんだと悟るだろう。だから玄関の鍵が開いていても空き巣だとはきっと思わない。

玄関の鍵を開けて扉を開く。ここに入ってからあまり時間は経っていないはずだったけれど、日が傾いたのか日光が目を差した。

振り返らない。早くここを離れてしまおう。俺は家から逃げるように駆け出した。それでも限界まで詰め込んだ旅行かばんとバックを肩に下げているから、走りはとても遅くて駆けるというほどかっこよくはならなかったけど。

大きなかばんを二つもぶら下げてのろのろと走る姿はとても滑稽

で、そしてとても怪しかったんだろうけど、幸運にも住宅街に人影はなかった。元々大体の住人は仕事で出はらっていてこの時間帯はあまり人はいないのだけれど、よく見る主婦のおばさんや定年退職したおじいさんさえいないのは、本当に幸運だった。

誰にも見つからないように気をつけながら、急いで走る。曲がり角も少し警戒しながら走り抜けた。でも。

俺は見た。

一瞬息が止まる。それから体温が一気に上がり汗が噴出す感覚。自分が見たものを信じられないまま、転びそうになりながらUターンして駆け抜けてしまった曲がり角を見る。

それは確かにあった。それは確かにいた。

誰もいない住宅街の道。傾きかけた日の光に染められて微妙なオレンジに染まってる。

でもそんなことはどうでもいい。

そんな色じゃない。

俺が見たのは日光のオレンジじゃない！

太陽じゃないんだ！

そうだ。

例えば太陽とは色も存在も正反対の位置にいる月。

月光。

月光に似た青銀色。

俺と同じ青銀色。

俺と同じ長く伸ばした青銀色の髪。

俺と同じ。

俺と同じ。

俺と同じ。

あれは俺に受け継がれた、元よりの青銀色だ。

「親父」

それは俺の親父だった。

気付けばバツクを放り投げて駆け出していた。

バツクなんてどうでもいい。そんなことどうでもいい！今は何もかもがどうでもいい！！あれに追いつかなくては。あれを見失ってはいけない。あれの所にたどり着くんだ！親父との距離は遠い。目で捕えるのがやっとの距離。なんて遠い。でも今なら追いつけるんだ。俺はそのために走っているんだ。可能なんだ！今あれは俺の手が届くところに居るんだ！！届くんだ！！！！

あれに！あいつに！！あの親父に！！！！

息が上がる。のどが擦り切れて干切れてしまいそうだ。全速力のせいで足も痛みを訴えかけてくる。でも大丈夫だ。限界なんてほど遠い。今の俺なら限界を超えても走り続けることさえできそうだ。大丈夫なんだ。そこに追いつくんだ。そこに届くんだ。そこまで俺は走り続けることができるんだ！！！！

追いついてどうするかなんて知らないしわからない。でもそんなこと関係ない。今はあれに追いつくことだけが、俺の全てだ。

俺の目の先で、親父は住宅街の外れの廃墟に入った。確か工場の廃墟。そこには誰もいないはず。好都合だ！！！！

そこまではまだ距離がある。でも廃墟は逃げない。そして親父がそこにいる。

そうだ。

親父が！

今！！

そこに！！！！

いるんだ！！！！！！

「親父iiiiiiii！！！！」

咆哮をあげながら廃墟に飛び込んだ。

汗が頬を伝う。

荒い呼吸が静まらない。

鼓動が大きく聞こえる。

全身に酷いだるさが満ちる。

でも。

目だけは。

何よりも正常だった。

いた。

そして、いる。

目の前に。

何の障害もなく。

俺と向き合って。

親父が。

五年前に全てを捨てていなくなった。

あの親父が。
いた。

俺と同じ髪。青銀色の、俺が受け継いだ色。受け継いだことを酷く悔やみ、遺伝というものを酷く恨んだ親父の色。その色に染まった長い髪は無造作に垂らされ散らされている。

少し掘りの深い顔立ち。薄い銀色の双眸。薄く赤い唇は引き結ばれて笑みを灯さない。肌は抜けるように白い。ひげも全く生えてなくてどこか清潔感を漂わせる。その顔に、表情は全く無い。変わらない、むかつくほどの無表情。でもそれは今年で四十五歳になるはずなのにどこか若く、そしてどこか美しい。完璧な、という美しさじゃない。銀色の目と髪があるからか神秘的な、という美しさ。男で息子の俺でも認める、なんというか綺麗に近い顔立ち。

白いコートに包まれた体。細身だけど程よく筋肉がついているきれいに均衡が取れた体だということを知ってる。背は百九十センチ近くてとても高い。

それは正真正銘、どこからどう見ても、俺が知る、俺が覚えてい
る、五年経っても全く変わってない、親父の姿だった。

「親父」

「………粹然」

呼ばれて、違和感を感じた。

粹然。俺の名前。俺の本当の名前。でも、捨てた名前。

ここ三日近く、俺はゼンと呼ばれていた。与えられた名前。新しい名前。A F O W 中の、俺の名前。

でもそれで呼ばれていたのは三日そこらで、粹然っていう本当の名前を忘れたわけでもない。

でも、違うと思った。

俺は粹然だけど、それでも違うと。

何で？

「久しぶりだな」

親父の声。

「五年ぶりか」

何の表情も映さない、無感情な声。

「大きくなっただな」

薄っぺらい、声のくせに。

そんな声で、何をほざく！

「何、で」

怒りか、興奮か、声が震えた。体中にわけのわからないたくさんの感情が蠢いて混ざって暴れてめちゃくちゃに駆け巡っていた。何を言いたいのかも何を言わなければならないのかも、感情で飽和した頭じゃ理解できなかった。

「何で、今頃」

でも。

口は動いた。

「何で今頃帰ってきたんだよ……！」
叫んでいた。

俺が聞いたかったのはそれなのか。それとも別の何かなのか。別の何かを言いたいのにこんなことを叫んでいるのか。

わからない。

ただ、俺は興奮している。

「粹然。こんな時間に何をしている？学校はどうした？」

親父はそう言った。表情を全く変えずに。全く動かさずに。

相変わらずの薄っぺらい声で、息子を叱る父親のような言葉を。

心配する気も、怒る気もないくせに。

だからそれは、俺の怒りを爆発させた。

「ふざけんじゃねえ！！！」

怒りで狂ってしまうかと思った。

「質問に答えろよ！！何で帰ってきたんだよ！何もいわないで出てって！五年も家をほったらかしにして！今更何の用だよ！！お前は何がしたいんだよ！！お前の・・・お前の目的は何なんだ！！！」

咆哮は何もない広い廃墟に響き渡り全てを振動させる。

叫んでも、親父はやっぱり表情を動かさない。また何か怒鳴ってやろうかと思っただけで、何を叫べばいいのかわからなかった。

わけのわからない感情は、今も体中を駆け巡っている。でもそれをどう言葉にすればいいのかわからなかった。さっきみたいに、突発的に言葉は出てこない。もしかしたらあれが、俺が言いたいことの全てだったのかもしれない。

「・・・俺の目的は」

俺の荒い息の音だけが聞こえる沈黙を、親父の声が揺らした。薄っぺらくても迷いなく揺るぎない、だから大嫌いな親父の声。そんな声がつむいだ言葉は。

「お前を殺すことだ」

「・・・え？」

その瞬間停止した思考をぶん殴るように。

空気が破裂したような音と共に、左肩に何かがぶつかり反動で左

腕が前に跳ね上がった。

「？」

ぶしゅ、と左肩から変な音がした。左頬に暖かい水が散る。

「え？」

左肩に小さな穴が開いていて、そこから赤い液体が……
血が、噴出して頬に降りかかる。

……血？

また、空気が破裂する音。今度は二発。衝撃は腹に二つ。足が立たなくなっていて、俺は衝撃に押されて後ろに傾く。腹を見た。白いシャツが真っ赤に染まってく。

ああ、これ。ラクトから借りたもののなのに。

腹に手を当てた。自分の体じゃないみたいに熱い。ぬるぬるして気持ち悪い。これは、血？

かふ、と何か粘ついたものを吐いた。紅い。口の中に鉄の味が広がりとわりつく。のどの奥に絡み付いて気持ち悪い。

霞んでいる視界に親父がいた。その手に、刃が長く太いナイフ。

ああ、これを俺は知ってる。これは親父の愛用のナイフだ。

それは、傾き倒れる俺の額を掠めた。前髪も少し一緒に切られる。でも掠めたつてことは、斬るつもりだったつてことだ。

親父が、俺を。

「親父、っ」

倒れた。背が床にぶつかる。ナイフが掠めた額の傷から血が流れて左目に入る。床にぶつかった背が痛んで、衝撃に体が軋んだ。視界の左半分が赤い。

そして背の痛みに応えるように、気付いていなかった痛みが一気に俺を襲った。

肩と腹と額。それは身を引き裂かれるような信じられないほどの痛みだった。

「ごおおおおああああああああっ！！！！？」

視界が赤い。涙も出ない。開いた口からは絶叫しか出なかった。

痛い。痛い！！！！

嫌だこんなの。

こんなの本当に死んでしまっ！！

死ぬ。死ぬ！！

嫌だ死にたくない。死ぬのは嫌だ。まだ死にたくない。嫌だ。こんなところで。こんなところで死にたくない！！

こんなところで、死にたくなんだ！！！！

左手は全く動かない。だから右手を動かして何とか体を反転させて這って逃げようと思った。右手もまともに動かないし体はずしりと重いし這ったとしてもナメクジよりも遅いだろ。でも逃げようと思った。

死にたくないから。

体を少し動かすたびに血が噴き出す。怖い。こんなにたくさんの血を見たことがない。顔の左半分は血で真っ赤だろ。怖い。こんなに、たくさんの血が、俺から抜けてく。

怖い。嫌だ！死にたくない！！

でも体を反転させようとして、俺の横に立つ親父に気がついた。

親父は俺を見下ろしている。何の感情も映さない冷たい目で、見下している。その手には、黒い真つ黒の銃。・・・・きつと銃だろ。初めて見た。

そして・・・・その銃口は俺に向けられている。体中が痛くて、体中血まみれで、死にそうになつて俺に。

親父の息子の・・・・息子であるはずの、俺に。

親父。

そう、言おうとした。さっきから叫び続けたせいでかすれてしまったらう声で。

でもそれは親父が撃った銃弾で、のどごと叩き潰された。

「ぎ、う」

代わりに出たのはそんなおかしな声だった。

撃たれた。のどを。首を。人間の急所を。

首を、撃たれた。

死ぬ。死ぬ！死んじゃう！！

叫ぼうとしたけれど、どこに何かがたまって叫べなかった。それどころか呼吸さえできなかった。息を吸おうとするとのどの奥から血があふれ出してそれを拒む。鼻から空気を取り込もうとしても、鼻にも血が逆流してきて無駄だった。苦しくて血を吐き出した。それは信じられないくらい多くて口とあごを汚す。もう口の中は血の味しかなかった。

親父はそんな俺を気にかけることもなく、銃口を少しずらした。それは少し下で、右腕あたりじゃないかと思った。

親父が、撃った。

骨が砕ける嫌な音がした。右肘からの痛みが脳を直撃する。痛い。脳が焼き切れてしまいそうだ。だけどその痛みは絶叫に変換されることはなかった。気管が血で詰まって絶叫を通さなかったから。

俺ののどから漏れるのは、理解不能なうめきだけ。

痛みの中で右肘の関節が砕けていることに気付いた。明らかにおかしい方向に腕が捻じ曲がってる。腕の感覚は全くなかったけど、わかった。

その右腕に、親父は弾を撃ち込み続ける。右肘に執拗なまでに弾を叩きつける。何発も何発も何発も。そんなに右肘に恨みがあるのかと思ってしまうほど。だから何度も何度も傷つけられてそんな腕に感覚が残っているわけがなく、痛覚神経も麻痺していた。

だから。

腕が千切れたことにも気付けなかった。

不意に親父が銃撃をやめて腰をかがめた。そして何か重そうなものをついで持ち上げたのが俺の目に入った。

俺の右腕だった。

俺の右手首をついで、千切れたひじのあたりが俺に見えるように、俺に見せ付けるように、ぶら下げる。

切断面からあふれた血が重力に引っ張られて俺の顔の上に落ちる。

俺の顔を生暖かい液体が濡らす。気持ち悪い。ひどい血の臭いだ。俺の腕。そこにある俺の腕。俺から離れた、俺とつながってない腕。切断面はひどいものだ。砕けた骨が突き出しているし赤い肉と筋肉と黄色い脂肪が絡み合って糸みたいな神経が垂れ下がってる。それらは全部血で汚れて赤く染まってたけど、なぜかそれがよくわかった。

親父が手を離し俺の腕が俺の顔の横に落ちる。ごとん、と重い音がして、たったこれだけの体の一部なのにこんなに重いなんて、と思った。

痛い。

どれだけの血を流したんだろう。

体が熱いけど、どこか根本的なところが冷たかった。

怖いと思った。死にたくない。死ぬのは怖い。死ぬのは嫌だ。

親父の目は冷たい。それが俺を凍えさせていくような気がした。

何でこんなに怖いのか。

あのとき。不良に刺されたとき。カズに拾われたとき。

あのときだって死にかけた。でもこれほど怖くなかった。死にたくないとは思った。でも思ったただけだった。こんなに怖いとは思わなかったのに。

なんで？

こんなに、怪我させられたから？

銃で撃たれてのど潰されて腕千切られて血がいつぱい出たから？

．．．．．死にたくないと思っても、もう死ぬしかないとかっているから？

だってこんな、こんな傷。

もう死ぬしかないじゃないか。

どんなに死にたくないと願っても。

もう。

．．．．．でも。

少し違う。

これは違う。

これはこれから死ぬからじゃない。

殺されるからだ。

殺意を持って、凶器を持って、それで、殺されるからだ。

他人の手によって、強制的に意図的に、殺されるからだ。

嫌だ。嫌なんだ。

死ぬのは嫌だ。

殺されるのは嫌だ。

やっと裏の世界で生きていける覚悟ができたのに。

レイたちと仲良くやっていけそうな気がしたのに。

そんな全部を強制的に途絶えさせられるなんて、そんなのは嫌だ。

だから。

死にたくない。

死にたくない。

生きたいんだ！！

ビキン

脳にそんな音と衝撃が走った。

外からの衝撃じゃない。

頭の中の何か重要なものが、壊れるような。

そんな衝撃。

それは唐突だった。

どくん、と心臓が一度大きく高鳴り、熱くてもどこか寒かった体が火でも引火したように熱くなる。

「……うつつ」

体の中身が一気に膨れ上がったような感覚がして、俺はそれに押し出されるようにのどに溜まった血を吐いた。でもそれ以上血があふれてきて呼吸をさえぎることはなかった。

「ひっぐ……がはっ!!? ごほっおええっ!!」

ずいぶん久しぶりに息をした気がした。血と共に肺の中に溜まった息を吐き、無我夢中で酸素を貪り食った。

何が……何が起きたんだ!?

体が引きつってる感じがある。体の中身が倍になったような感じだ。その中身が皮膚を突き破ってあふれ出そうとしているようだ。た。

気持ち悪い。

「……っ、が……っああああああああああ!!」

その気持ち悪さに耐えかねて、絶叫がのどを震わせた。

……のど?

中身が暴れているような左腕で恐る恐るのどに触れた。震えてる指が感じたのは血塗れたのどの感触。

血に塗れているけれど、挟れてるわけじゃない。血をあふれてるわけじゃない。ちゃんと肉があって皮膚があってその上に血がついているだけの、のど。

致命傷だと思っていた傷が、なくなっていた。

「……っ、ああああああああああああ!!」

傷がなくなっていることが信じられなくてもう一度叫んだ。のどに残っていた血が数滴舌の上に散った。

治ってる。完全に完璧に傷があったことさえわからなくなっていた。

体の中身が倍になったような気持ち悪さもだいたい収まってきている。

苦しくない。呼吸ももうちゃんとできた。

それに。

痛く、ない。

のどに触ったのが動かなくなっていたはずの左腕だということに気付いて、俺は左腕を動かして体を起こした。

起こせた。

右腕は肘から先がない。でも痛くない。

肩も腹も血に塗れている。でも痛くない。

痛くないけど、どう見ても致死量の血が服を赤く染めて、コンクリートの床までも赤い血の輪が広がっている。

これ、全部俺の血？

こんなに血が流れたのに。

こんなに血を失ったのに。

何で俺生きてんだ？

「・・・・・・・・粹然」

信じられない思いで血を眺めてた俺の耳に、親父の声が届いた。

親父の声以外は、何も届かなかった。

「やっぱりお前は・・・・・・・・COLORSになってたか・・・・・・・・」

カラーズ？

なんだそれは？

またしても、異変は唐突だった。

右腕に違和感が走り切断面が疼いた。

そして俺は信じられないことに、転がっていた俺の右腕が痙攣するように動いたのを、この目で見てしまった。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

瞬間、千切れた腕の千切れた血管から赤い何かが首をもたげた。蛇？

そう思った。勘違いした。勘違いだと気付いたのはその蛇が空を走って俺の右腕に潜り込んだときだった。

「・・・・・・・・っえ・・・・・・・・・・・・・・・・」

蛇じゃない。赤い紐みたいのが俺の千切れた右腕をつないでる。紐でもない。

気付いた。

血だ。

俺の血が、俺の右腕をつないだ。

そして、それは起こった。

一瞬、転がった右腕が引っ張られるように動く。一瞬じゃない。

腕はつながった血に引っ張られて床を引きずられる。引きずられて、こっちに近づく。

「ひっ・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

怖くて逃げようとしたけれど、血を失いすぎたせいか体が動かない。血でつながった切断面が血に引っ張られてくっつく。

くっついてそして。

つながった。

切れ目どころか傷ひとつそこにはなく、血がまとわりいているだけで肉や神経がはみ出しているようなこともなくちゃんと動く。

動く。

思い通りに。

さっき千切れた腕が。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ひいあああああああああああああ

あああ!!」

おかしい。

こんなおかしい。

こんな。

なんでだ。

何で俺は生きてるんだ!!?

「粹然っ！！！」

・・・・・・親父？

俺が親父を見上げると親父はなぜか苦しそうに目を細めた。

それはずつと無表情で冷たい目をしていた親父の、初めての变化だった。

「粹然・・・・・・！！！」

「親父・・・・・・」

どこかすがるような気持ちで親父を見た。

だって、もうわからない。

「なんだよこれ」

これは何なんだ。

俺は何なんだ。

やっぱり駄目だったんだ。

俺は駄目だったんだ。

俺は、人間じゃなかったんだ

だって、生きてるんだから。

「親父・・・・・・」

もう、嫌だ。

俺は目を閉じた。

その瞬間俺はこめかみの辺りに強い衝撃を受けて、混乱と興奮と恐慌で凍りついた俺の意識は何もわからないまま強制的に闇に落とされた。

S I D E ハク

粹然を殴って気絶させた。

地獄絵のような光景だった。

青銀に紅が染み込み、自らが流した血に塗れ、血が入り込み混じった瞳には狂気に満ちていた。

粹然は狂いかけていた。人間離れた自分に絶望していた。だから無理矢理気絶させてこれ以上何も考えないようにした。

殺そうとは思ったが、狂わすのは忍びない。

後悔した。

もう少し機を見て殺せばよかった。

自分の家に帰りそれでも留まらず名残惜しそうに立ち去る粹然を見て、ここで殺さなければならぬと焦ってしまった。

ここで粹然をあの組織に戻してはいけないと思った。

だからCOLORSを殺す準備を怠ったまま粹然を殺そうとした。けど失敗した。「最強」の再生力を甘く見ていた。まさか切り落とされた腕までつなげるとは。本当に甘く見ていた。

だけどそれだけのことで。

たったそれだけの焦りで。

粹然を狂わせかけてしまった。

殺す覚悟はできても狂わす覚悟ができないなんて、情けない。

カツツと靴音が眼前で止まった。

ざんばらに切り揃えられた黒髪。左目の眼帯。唇から垂れているひき飴の紐。そして虚ろな目。

こいつを知っている。リストに乗っていた顔だ。確かセトといった。あの組織の一員。異端と言えるCOLORSの中でも特に異様な雰囲気纏う男。

セトはその虚ろな目で俺を一瞥すると、少しも表情を変えずに血だまりの中に倒れる粹然に手を伸ばした。

その手が肩に触れつかみ、揺らす。かなりゆっくりとした動きだが粹然は起きない。そうだろう。かなり強く叩いたし精神的にもショックを受けて深い眠りに落ちているはずだ。ちよつとやさつとでは起きはしないだろう。

セトは粹然が起きないのを知ると、ロングコートを脱ぎ倒れる粹然を抱き上げてそれに包んだ。そして粹然を軽々と持ち上げ俺に背を向け歩き出す。

「俺を捕まえないのか」

俺はセトに対しそう言ってみた。この状況からすれば粹然をこんな風にしたのは俺以外有り得ないのに、セトは何もしないから。

セトは、背を向けたまま歩みも止めず、酷くゆっくりと頷いた。

S I D E ゼン

・・・起きた。

起きたけれど眠っている。

夢と現実の狭間。覚醒の途中。

夢を見た気がする。

酷く怖い夢だった。

親父に殺されかけた夢だった。

それを強く覚えている。

何度も死にたくないと思った。

そうして生き返って見たら死ぬことよりも怖かった。

人間なら死ぬはずなのに俺は生き返ったから。

俺は人間じゃないんだと証明されたから。

本当に、怖かった。

でも、おかしい。

夢じゃないと、頭のどこかでわかってる。

おかしいだろ。こんなの。

夢じゃなかったら何なんだろう。

夢じゃないのなら、現実。

現実。

・・・ああそうだ。

あれは現実なんだ。

夢でもなんでもない。

逃げたところで俺に一生付きまといて離れない、俺の中の現実。

俺って人間じゃなかったんだと、俺は納得してる。受け入れてる。

ちゃんと、この目で見たから。
ちゃんと、この体で感じたから。
夢だと思いたくても、ちゃんと痛かった。
俺はどうすればいいんだろう。
人間じゃない、俺は。

「ゼン」

名を呼ばれた。

目を開いた。

白い。

何もかもが白い。

これは……夢か？

いや違う。現実だ。

見たことがある。

医務室の天井だ。

俺がここに来たときと同じ。

同じ白い天井だ。

「ああ、やっと起きた。ゼン……よかった」
声。

女の声。

知ってる。

この声を俺は知ってる。

「レイ？」

少し視線をずらすと、すぐそこにレイの顔があった。俺の顔を覗き込んでいるようで、その顔に色濃く安堵の表情が浮かんでる。

「ゼン、ちゃんと私のことわかるのね？」

レイは俺の頬にそっと触れた。

それは腫れ物に触れるようで、脆いものに触れるようで、どこか恐る恐る触れているように思えた。気のせいかもしれないけれど。

「ハクユもラクトもユオウもキョウもセトさんもみんな一緒にお

出かけたことも覚えてるのね？」

覚えてる。

ハクユ。琥珀色の髪で人魚みたいで彫り師でぬいぐるみいっぱい
の女。

ラクト。灰色の髪で俺となんか似ててつなぎ着ててやたら笑顔な
男。

ユオウ。桜色でハクユに似た花のタトゥーで俺より強いらしい女。
キョウ。黒髪で同じ年ぐらいで改良班の頭で一番普通に思える男。
セト。目が虚ろで眼帯で引き締めて身体障害者で一番異様な男。

みんな、知ってる。覚えてる。みんなで買い物に行った。一度別
れてゲームセンターで合流して昼飯食べて……………。

「じゃあ、その後は覚えてる？」

その後は……………。

……………。

……………そうだ。

俺は。

俺は親父に殺されかけたんだ。

いや、殺されかけたんじゃないなくて、殺されたんだ。

そして俺は、生き残った。生き返った。

あの状態から生き残れば、生き返ったといっても変わらないだろ
う。

「……………覚えてるんだね」

ゆっくりと、うなずいた。

「何があつたかわからないけど、ゼンは血まみれでセトさんに運ば
れてきたんだよ。セトさんいつの間にかいなくなっちゃったなって
思ってたなら、死にかけのゼン連れてくるから。びっくりしたよ」

セト？

あいつが、俺を助けてくれたのか。

何で俺を助けることができたのか謎だったが、あの異様さを思い
出してあいつならどんなことでもやりかねそうだと思う。

「ゼンは傷は全くなかったんだけど、致死量ぎりぎりまで血を流しててね。結構危ない状態だったんだけど、カイさんたちががんばってくれて命に別状はないそうだよ。今のゼンは血が全然足りなくて貧血状態。体、あんまり動かないでしょ」

言われて、気付いた。

体が動かない。指などは軽く動かせるものの、腕を上げたり体を起こしたりすることは到底無理そうだ。しかも左腕になんか違和感があると思ったら、どうやら点滴されているらしい。肘の内側辺りに少しの痛みがある。

「私はゼンに何があったか知らされてないけど、誰かに殺されかけたんでしょう？今A F O Wではその報復に全力を注いでる。ゼンが動けるようになれば、きっと待望の初任務が命じられるでしょうね」
誰かに殺されかけたと、どうしてわかったのだろう。

そんなことを思っていると、扉の開く音がした。

「カズさん」

レイが、扉のほうを見てつぶやいた。ベッドに寝ている俺からは見えないが、きっとカズが来たんだろう。

「ゼンが、起きました」

「おう、起きたかゼン」

俺の視界に入ってきたのは、いつもと全く変わらない黒シャツ姿のカズだった。

「・・・・・・ああ」

声は、かすれていた。

「体調はよろしくなさそうだな。言っとくがめえはうちの大切な戦力なんだ。勝手に死ぬな」

カズは銜えた煙草から煙を吐いた。その臭いが鼻に届いて気持ち悪い。

「カズさん、ここ医務室ですよ。煙草消したらどうですか？」

「うるせえよ」

全く聞く耳持たず、またうまそうに煙を吐く。

「ゼン。今てめえを殺した輩を謀報班コレクターが追ってる。血いなくしてぶっ倒れてる場合じゃねえぞ。お前の初任務だ。お前の手で、報復しろ」

報復。始まりの雨の日を思い出した。そういえばすべての始まりは報復だったんだっけ。

あの報復が、俺の人生を百八十度変えた。

報復。俺は親父を殺すのか？

「覚悟を決めることだな」

カズの声が淡々と響く。

「今は揺れてるかもしれない。今は迷ってるかもしれない。でももう駄目だ。お前はA F O Wの一員だ。C O L O R Sになる、覚悟を決めろ」

C O L O R S。親父も言ってた言葉。

覚悟・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・もう、わけわかんね・・・・・・・・・・。

俺は泣きたくなるのを必死にこらえて、きつく目を閉じた。もう、何もかもがどうでもいい気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2099a/>

COLORS 第一部

2010年10月16日15時40分発行